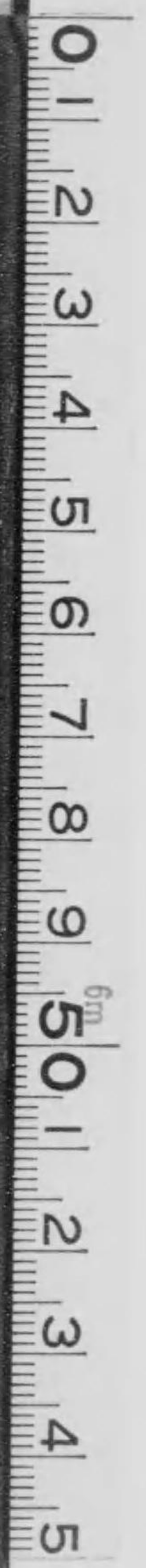


704
R88



始



9.4.19

112
113
114

340-67

704
R88

ラ
ス
キ
ン
抄

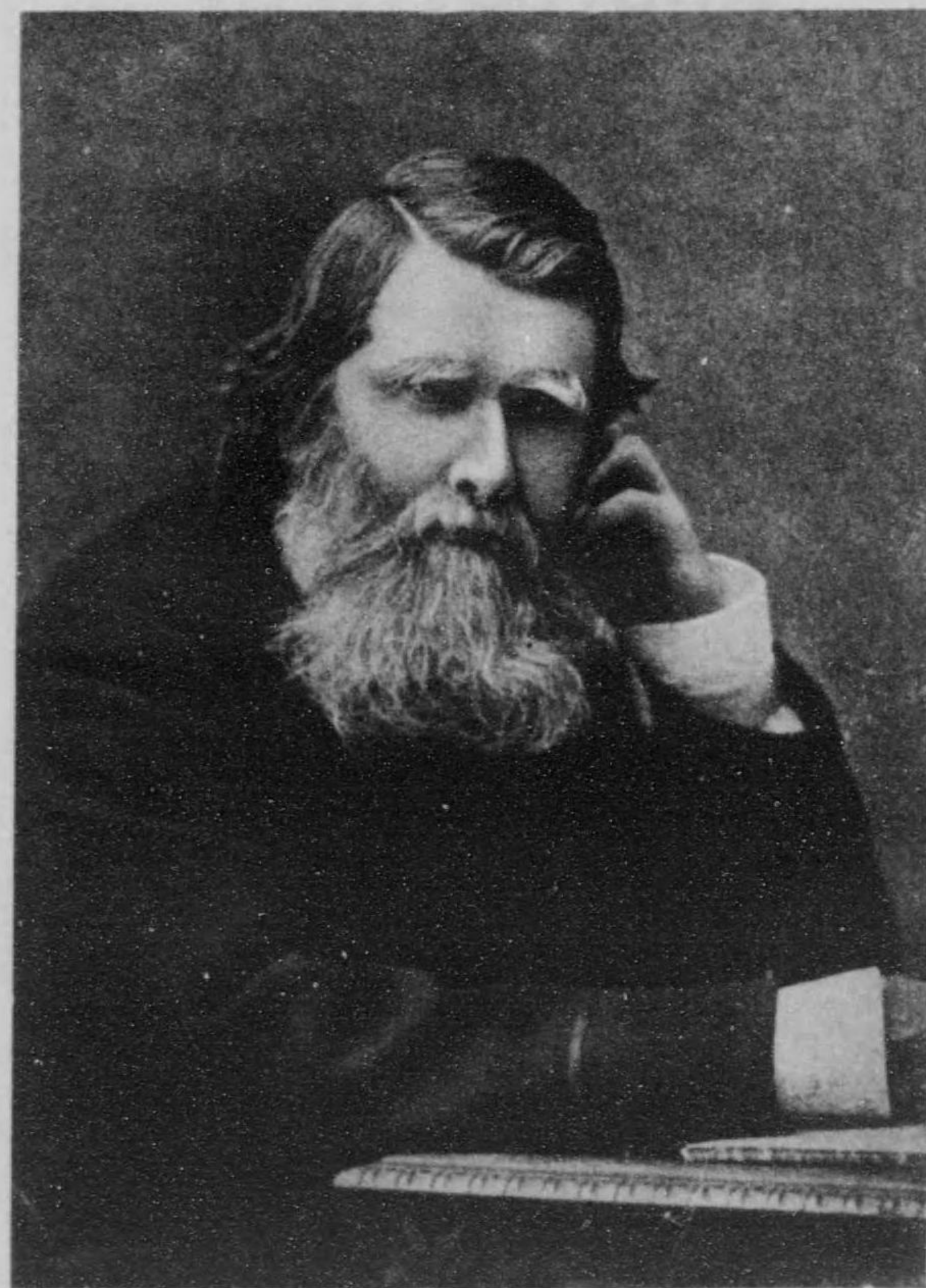
SELECTIONS FROM RUSKIN

ARRANGED & TRANSLATED

BY

T. SAWAMURA

Perce
Perceive



John Ruskin

趣味叢書第八篇



キ
ン

抄

澤村寅二郎譯

趣味叢書發行所藏版

5. 2. 29
購求

自序

浩瀚なラスキンの著述の到る處に散在する思想の珠玉を拾集めることは、豫てより私の希望でありました。此度友人黒田鵬心君の依頼を好機として、幾分此希望を實現し得たことは、私の甚だ愉快に感ずる處であります。ラスキンの思想は廣く社會の各方面に亘つて居りますが、爰には其自然と美術と文學に關する觀察のうち、偉人の面目を最もよく表はした最も興味深きものを集めることにしました。材料は主として「近世畫家」の第

一卷と第三卷より抜き、別にラスキンの建築彫刻上の論文エデキンバラ講演を収めました。此講演は建築と彫刻に關するラスキンの思想を最も通俗に簡潔に表はしたもので、ゴシック建築の爲めに萬丈の氣焔を吐き、ルネサンス萬能の當時の建築界に多大の感動を與へた痛快な議論であります。猶此講演の譯文に就いて一言致したいことは、他の處は殆んど原文の逐字譯であります。此講演だけは一種の印象譯であつて、譬へば原文を讀んだ人が、其内容を他人に語つて聞かせる時

のやうな態度で筆をとりました。従つて自分に興味を感じない部分、又は讀者に面白くないと思はれる部分は自然省略され、興味の深い處は原文に忠實となり、難解な處は説明的となつて居ります。興味を主とする場合、斯様な譯文も亦一種の翻譯として存在する権利があらうと思ひます。

大正四年四月

著 者

凡例

一、前後の關係其他の理由の爲め省略した個所、又は意味の聯絡上附加した文章は、前者は點線、後者は括弧を以て一々明示する筈ですが、目障と考へてさういふ印を一切省きました。

二、各文章の終りには其出處を掲げました。其うち M. P. は Modern Painter の略、S. V. は Stones of Venice の略、其次の數字は順次「巻」「部」「編」「章」「節」を示し、例へば M. P. I. I. I. は「近世畫家」第一卷「第一部」第一編第一章第一節を意味します。

趣味叢書 第八篇 ラ ス キ ン 抄

目次

第一編 美

- 一 美とは何ぞや……………三
- 二 趣味の意義……………二五
- 三 美感……………八

第二編 自然

- 一 J 大空……………三三
- 二 J 雲……………三四
- 三 水……………三四

| | | |
|---|----|----|
| 四 | 山嶽 | 四〇 |
| 五 | 樹木 | 四七 |
| 六 | 草 | 四七 |

第三編 詩

| | | |
|---|--------------------------|-----|
| 一 | 詩とは何ぞや | 六五 |
| 二 | 創作力 | 七四 |
| 三 | 大藝術家の特色 | 八六 |
| 四 | 十九世紀の代表詩人—スコット | 九〇 |
| 五 | 感情的錯誤 (Pathetic Fallacy) | 一〇三 |

第四編 藝術

| | | |
|---|-------|-----|
| 一 | 藝術と世評 | 一六一 |
|---|-------|-----|

| | | |
|---|--------------|-----|
| 二 | 藝術品の與へる快樂と利益 | 一六五 |
|---|--------------|-----|

第五編 繪畫

| | | |
|---|--------|-----|
| 一 | 繪畫と想像力 | 一八七 |
| 二 | 繪畫の優劣 | 二二七 |
| 三 | 仕上の意義 | 二六七 |

第六編 建築及彫刻

| | | |
|---|-------------------|-----|
| 一 | エデキンバラ講演 | 二八一 |
| 二 | 真正のグロテスクと虚偽のグロテスク | 三五六 |

第一篇 美

挿畫目次

| | | | |
|------|--------------|--------------------|-----|
| 第十五圖 | 同 | 上(ゴロナ寺院玄關のもの)..... | 同上 |
| 第十四圖 | もの | | 二七 |
| 第十三圖 | 虎の頭と其の希臘的進歩 | | 二四二 |
| 第十二圖 | アミアン大伽藍のニツチ | | 二七七 |
| 第十一圖 | 壁の一種 | | 二七六 |
| 第十圖 | 同上 | | 二七四 |
| 第九圖 | リオン大伽藍の彫刻 | | 二七三 |
| 第八圖 | クリタンス寺の塔 | | 二七四 |
| 第七圖 | 希臘風に生長せしめた秦皮 | | 二九七 |
| 第六圖 | 同上の俯視圖 | | 二九六 |
| 第五圖 | 秦皮の若枝 | | 二九五 |
| 第四圖 | 窓の一種 | | 二九二 |
| 第三圖 | オリクナム城の窓 | | 二八九 |
| 第二圖 | 希臘式の窓 | | 二八五 |
| 第一圖 | 樹木の仕上げ | | 二七五 |
| 扉 | ラスキン肖像 | | 扉 |

一 美とは何ぞや

或る物體が智力の直接明白なる働きを用ゐず單に其外面的性質を熟視した許りて、吾人に愉快を感じしめる場合、私は其物體を或る點に於て又は或る程度まで美だと稱へる。何故に吾吾が或る形或る色から愉快を感じて、他の形他の色から愉快を感じないかといふ疑問は、丁度何故吾々は砂糖を好んで苦蓬ニガヨモギを嫌ふかといふ疑問と同じく、返答が出来ない。何れ程精妙な研究も結局それが人間自然の本能人心の理法であるといふ事に

歸着し、其理由としては單に神がさういふ風に吾々を造つたのであるといふ以上に説明を與へることが出来ない。かやうな本能的傾向に對しては教育と偶然の事情が無限の影響を及ぼし、それを開發することもあれば阻害することもあり、指導することもあれば誤ることもあり、正しく導いて最も鋭敏な完全な感覺力を與へることもあれば、等閑に附してあらゆる誤謬と疾病に罹らせることもある。吾々が持つて生れた自然の嫌惡欲求に何處までも従つて、斷へず従ふ爲めに益々其自然律をして權威あるものとなし、結局神が元來愉快を與へる爲めに造つて置いたものから常に愉快を感じることが出来、與へられたる一事物よりして最大多額の愉快を感じずる人が即ち趣味の人である。

二 趣味の意義

之が趣味といふ議論の多い言葉の眞意義である。完全なる趣味とは、吾人の道德性を純粹圓滿の状態に於て引付ける事物に對して、最大極度の愉快を感じずる力である。かやうな事物から左程愉快を感じない人は無趣味の人である。其他の事物から愉快を感じずる人は邪趣味惡趣味の人である。

故に「趣味」といふ言葉と「判斷」といふ言葉を區別しなければならぬ。此二つは終始混同されてゐる。判斷とは智力の確實

な作用を表はす一般的の言葉であつて、凡そ判断を下し得べき事物には、一つとして應用の出来ないものはない。適不適の判断もあれば眞偽の判断もあり、正邪の判断もあれば難易優劣の判断もある。併し智力の以上の働きは所謂本來の趣味とは全然異つたものであつて、趣味とは人心の圓滿なる状態に於て、さうするのが本當だといふ以外に何等の明瞭な理由なくして、他の物よりも或る一物を本能的に即坐に選擇する力である。

併し注意して頂きたいことは、美の觀念には智力の直接の働さがないからと言つて、私は美が智力に何等の影響を及ぼさないものである、智力と全く無關係なものであると主張する積りではない。總て吾々の道徳的感情は智力と非常に密接に關係

してゐるから、一方に訴へやうとすればどうしても幾分他方を動かさない譯には行かない。總じて高等なる美の觀念にあつては、其愉快の大部分が事物の適合とか關係とかを微妙に精細に知覺する純然智的な働さに基因することは、殆んど疑ふ餘地のないことで、かやうな知覺によつて吾々は普通「智的美」と稱し又稱して差支へのない最高の觀念に到達するのである。併しながら猶智力が決して直接に働くのではない。委しく言へば、單純美の最高觀念を得つゝある人に對して、何故さういふ觀念を生ずる事物が好きであるかと問ふたらば、明瞭な返答を與へることが出来ないだらうし、又心中に何か纏つた思想を見つけて之が其愉快の原因であるといふ譯には行かないに相違ない。

其物が自分の心を満足させる、充實させる、清くする、高くするとは言へる。併し何故、又は何のやうにと言ふことは出来ない。若しそれが出来て、其事物に明瞭な思想の表現を認めたとを示し得らるゝならば、其人は美の觀念以上のものを得たのである。即ち關係の觀念を得たのである。(M. P. I. i. 1. 6. 1-4.)

8

三 美感

美の感じは一方肉感的でもなく一方智的でもない。美の感じが眞實且痛切ならん爲めには、人の心が一種純潔な公正な潤達な状態を必要とする。従つてかくして感じ得た美的事實を

愈々智力が判断するに當つても、其判断の宜しきを得ると否とは、それに對する純感情の鋭さによつて定まる。美に對し生來鋭敏な感性を有する人が、純潔な心を以てそれを受入れず或は全然其心に受け入れないが爲め、少しも之を解することなく、何等の益を受くることなく、單に一身の欲望の奴隸となし、劣等なる肉慾の調味劑となし、遂には其情緒全體が全然同一の俗調を帯び、美の感覺が肉の下僕となるに到ることは、吾々の往々見る所である。(M. P. II. iii. 1. 2. 8.)

第二篇 自然



大空

普通世間の人が空に就いて知る處の甚だ少いのは奇妙である。空は自然が其仕事のうちで、他よりも一層人を欣ばす爲めに力を盡してゐる部分である、自然が人に語り人を教へることを唯一の明かな目的としてゐる部分である。然かもそれが丁度自然界で吾々の最も注意を怠つてゐる部分なのである。自然の他の作物は、大抵單に人を欣ばすといふよりも以上に、一層實質的な肝要な目的が、其組織の各部分に表はれてゐる。併し

空の肝要な仕事は、吾々の知る處では、三日に一度位ひ大きな醜い黒い雨雲が青空の上を覆うて、萬物が充分霏を得、それから又次の時まで依然の如く蒼々として居つて、其上露を生ずる爲めの朝夕の霧さへあれば、大抵濟みさうに思はれるのである。然るに事實は之に反して、吾々の生涯のどの一刻をとつても、自然は常に次から次へと、或は眼先きの變つた、或は美しい、或は莊嚴な光景を表はし、最も完全な美を生ずべき最も巧妙な恒久な原理に基いて常に活動してゐるから、それが皆吾々人間の爲めに爲され、吾々の不斷の愉快の爲めに設けられたものであると考へざるを得ない。又如何なる人が如何様の境遇にあつて、假令他の愉快なもの美しいものからどれ程遠かつてゐやうとも、此自

然の作用だけは何時も見ることが出来る。地上の最も壯麗な風景は、少數の人しか見又は知ることが出来ない。人間は常にそんな立派な景色の中に住むやうに造られてはゐない。人間はそのやうな景色を己の存在によつて傷ける。又何時もそんな景色に接して居ると其美さを感じなくなつて仕舞ふ。然るに空は萬人の爲めに存在する。空は甚だ美しいが、併し人の心の日常の糧かてとして、美し過ぎることもなければ良過ぎることもない。空はそのあらゆる作用に於て常に人の心を慰め、人の心を高め、之を鎮め、之を清めて、其汚濁を洗ひ去るのに適してゐる。或る時は靜かに、或る時は奇に、又或る時は嚴かに、一瞬も同一なことはない。其情の激し易い點では殆んど人間に等しく、其情

の濃こゝろかな點ては殆んど心靈に等しく、其悠久たる點に於ては殆んど神に等しく、吾々の不朽の靈性に對して訴ふる其意義の明白なことは、恰も吾々の肉體に對する其實罰的又は恩惠的使命の重要なのと等しい。

然かも吾々は肉體的感覺に對する影響以外に空を注目せず空を思考の題目としない。空は禽獸の感ずる以上の意義を傳へ、雜草や蛆蟲と共有の光や露より以上のものを頭上の蒼穹から得よとの神の意志を表はしてゐるにも係らず、吾々は天空の諸現象を眺めて、唯それが無意義な單調な偶然の連續であつて、一瞬の注意も一顧の價もない程、平凡な無益なものだと思つてゐる。吾々が全く無爲退屈に苦んで、遂に最後の手段として空

に注意を轉ずる時、話頭に上るものは其何れの現象であるか。

甲は雨降りだつたと曰ひ、乙は風が吹いたと曰ひ、丙は暖かつたと曰ふ。多勢喋々する中に、誰が私に昨日の午後、地平線を取巻いた、高い白い雲の嶺の形狀と其險しさを告げることが出来るか。細い日光が南から射して其頂きを撃ち、遂にそれが溶けて壊はれて青雨の粉末と化し去つたのを誰が見たか。日光がその面から消えて、西の風がそれを枯葉の如く吹き立てた昨夜、誰がその死雲の舞踏するのを見たか。

以上の事實はそれを見る人もそれを惜しむ人もなくて皆過ぎ去つた。假りに冷淡な人の心を束の間でも動かすものがあるならば、それは唯粗大な又は異常な自然現象の結果たるに過

ぎない。然かも自然の崇高な趣きが極度に表はれるのは、決して原始的自然力の強大猛烈に發現した場合ではない。霰たばしり、旋風吹き捲くる際ではない。神は地震や電光のうちに在まらずして、静かな微かな囁きのうちに在ます。天地の晦冥電雷のはためきならでは動かされぬ精神能力は人間性情中の鈍い下等な能力である。悠揚迫らない威容を具へた静かな落ちついた光景、深遠平靜悠久な眼に見るに先つて求め、會得するに先つて愛さなければならぬ光景、天使が日々吾等の爲めに造り、然かも永遠に變化する光景、常に缺くことなく、然かも二度と繰返されることなき、求めて常に得べく、然かも二度と得難い光景——信仰の道を主として教へ、美の祝福を主として與ふるもの

は實にかゝる光景である。

かゝる光景こそ最も高い理想を抱いた畫家が研究すべき光景である。かゝる光景こそ彼が其理想を組立てるに適した材料である。然かも一般世人はかゝる光景に注意することが極めて少い。従つて彼等は美術と甚だ縁遠いにも係らず、その空に對する觀念は、實際の事實よりも寧ろ繪畫から來てゐるものが多い。雲の談が出た場合に、十分教育ある人士の心中に形作られる觀念を、假りに検査し得たならば、その觀念は、曾て其人が昔の畫家の作品で見た、青雲白雲の斷片から出來てゐる場合が多いに相違ない。

○昔の畫家にあつては雲は雲空は空である。兩者の間に何等

の關係をも暗示しない。空は一個の清らかな高い物質的な堂宇であつて、雲は其下に懸つた別個の物體であると考へられてゐる。従つて其空が色調トーンの上で假令どれ程精巧美妙に深みを帯びてゐても、吾々は常に之を一種の凹面として眺め、液体として透視トランスパレントしない。

處て空の特質のうちで、他よりも一層描寫の價值、描寫の必要の多い點があるとすれば、それはワーズワースが「漫遊記」の第二卷に與へた點であらう。

The chasm of sky above my head
Is Heaven's profoundest azure. No domain
For fickle short-lived clouds, to occupy,

Or to pass through;—but rather an abyss
In which the everlasting stars abide,
And whose soft gloom, and boundless depth, might tempt
The curious eye to look for them by day.

(我が頭上の穹窿は天の最も深遠なる青色を表はす。こは氣まぐれの短命なる雲が占領し又は通過する爲めの領域ではなくて、寧ろ永遠無窮の星の棲息する一個の深淵である。して其柔かに暗い無限の深みは、好奇の眼を誘つて、夫等の星が晝間何處にあるかと求めしめる)

又デッケンズは其米國紀行中に同じく此點を注意して、彼が船の甲板に横はつてうつらうつらとしながら、空を眺めたのでなく、覗き込んだと言つてゐたのを記憶する。諸君試みに晴朗な

空の清い青色を熟視するならば、其安らかな休息其ものゝ中に、
變化と充實の存在することを認めるだらう。空は平らな死ん
だ色ではなくて、可透性を具へた空氣の戰えてゐる、深い透明な
立體で、そのうちに諸君は點々として落下する何色とも定め難
い光と、幽闇な影、暗い水蒸氣のかすかな朧朦たる跟跡を發見す
る、或は發見するやうに思ふ。(M. P. I. ii. 3. 1. 1—7.)

* * * * *

蒼空の色は勿論水蒸氣の色ではなく、純粹な大氣の色である。
純粹な窒素と酸素の色である。そして吾々と虚空の間に横は
る空氣の全量が生ずる色である。此色は其うちに含まれる水
蒸氣の量の變化に従つて種々に變化し、此水蒸氣の色は最も不

完全な、従つて最も眼につき易い状態に於ては、湯氣のやうに純
白である。此白色は、他の白色と同じく、太陽の光線の暖かな色
を受け、其暖かな色調を空の青色と混ざる爲に、其量と其溶解の
程度に従つて空の色を淡くし、同時に多少鼠色を帯びしめる。
此鼠色の水蒸氣は甚だ顯著な場合には霧となり、部分的に集ま
つた時雲となる。故に空は透明な青色の液體であつて、其種々
の高さの處に雲が懸かつてゐるものと考へれば可い。但し此
雲は、其液體に多少混和した物體の、特に眼につく部分であると
見なければならぬ。(M. P. I. ii. 3. 1. 4.)

一一 雲

雲の第一の最も重要な性質は、その雲を生ずる空の高さによつて定まる。大氣は便宜上三つの域に分かつて、各の域に全く性質の異つた雲が生息するものと考へて可い。勿論實際はあらゆる高さの處に雲が出来、其高さに應じて多少それより上層又は下層の性質を帯びるから、自然が此三つの域を截然區別してゐる譯ではない。故に空の光景は組織的の形を有する雲の無限の階級から作られてゐる。そして各階級は其階級の雲の

みを生ずる獨特の領域を有し、其各の特色は、非常な距離の間隔を以て明瞭に區別されて現はれる時、比較對照して初めて適當に判斷することが出来るのである。故に私は空を三つの域、即ち上層又は卷雲帶 (the region of the cirrus)、中層又は層雲帶 (the region of the stratus)、下層又は雨雲帶 (the region of the rain cloud) の三つに分けて論じやうと思ふ。

私が上層に含めて考へたい雲は、歐羅巴の最高の山嶺にも觸れない、故に少くとも一萬五千尺の高さ以下では決して造られないものと見て可い。此雲は繊細な水蒸氣から出来た無數の動かない線であつて、好天氣が四五日續くと、蒼々たる大空を或は縞或は斑點を以て飾るのが普通である。其主なる特質は第

一均整 (Symmetry) である。此雲は或る一定の明かな秩序に従つて配列されるのが殆んど常であつて、普通長い列を爲し、時には天心から地平線まで達する。各列は殆んど同じ長さの、中央が太くて両端が見えない程薄く消えてゐる無数の横の線から出来上つてゐる。此列は風の方向に向ふ。そして横線は勿論それと直角を爲してゐる。此横線は中央の處で普通少し曲がつてゐる。往々此種類の二つの組織體が、風の二種の流れを表はして、異つた高さに於て交叉し、一種の網の目を造ることがある。も一つよく出来る形は、非常に繊細な絹絲狀の平行した織緯が澤山集つて、普通其の一端から輻射し、又は輻射する傾向を有し、他端に於て鳥毛のやうに長く擴つてゐる場合である。俗に之

を、牝馬の尾メウマノビシと稱してゐる。鳥毛のやうに擴大した一端は、往々上方へ曲がつてゐる。或る時は背後へ曲がつて又上へ曲がつてゐる。そしてその雲が甚だ強靱であつて、假令どれ程曲げられても分裂することを肯んじないと言つたやうに、非常な弾力性と共同性を同時に具へてゐるやうに見える。細い方の端は何時も風に向ひ、其織緯は風の方向と平行してゐる。上層の雲は此二種の形の何れかの變態をとるのが常である。故に此種の雲は意匠と組織を具へてゐる點に於て他の總ての雲と異つてゐる。之に反して他の雲は、勿論破ることの出来ない法則を具へてはゐるが、然かも相對的並に一般的の統一といふものを全然有して居らぬ。上層の雲の下層の雲に對する關係は、丁度

觀兵式の兵卒が混雜した群集に對する關係に等しい。人である以上頭や手で歩きはしない。同様に如何なる雲にも破ることの出来ない法則がある。併し上層の雲以外に均整的統一らしいものを有する雲は一つもない。

第二、輪郭の尖銳なこと。上層雲の横筋の風に向つた方の輪郭は、往々空中現象中の最も尖銳な輪郭である。他の種類の雲の何れ程ハッキリと力強く畫かれた輪郭でも、此輪郭の繊細な銳さに及ぶものはない。黒い雷雲の輪郭は全體の色又は濃淡の非常に力強い爲め眼を引き易いが、併し輪郭として見れば、輕快な微風の晴天に見える、卷雲の輪郭と比較して、柔く且不鮮明である。之に反して其横筋の風と反對の側の輪郭は常に柔か

て、往々眼に見えぬ程薄く、其筋と次の筋との間の青色の裂目の中へ溶け込んでゐる。普通片側(風に向つた方)の輪郭が銳ければ銳い程、他の側(風と反對の方)の輪郭は柔かい。それに雲全體が薄平たく見え、横筋が丁度魚鱗の如く互に上へ上へと重つてゐるやうに感ぜられる。晴れた無風の空に何時も見ると、横筋の双方の端が柔かな時は、雲が充實して丸く、羊毛狀を呈する。

第三、群集的なこと。かやうな水蒸氣は非常に繊細に出來て居つて、時には無數の細かな部分に分かれてゐる。凡そ天地間に之れ程、數の觀念を深く與へるものはない位である。數の觀念はそれが均整である時最も深く感ぜられるのが常である。

(パーク)崇高論第二編八節参照)従つて海の浪も若葉青葉も此雲程深く敷を表はし、敷を印象させない。猶又自然は單に無限の横筋や線のみを以て満足しない。各の横筋は夫れ自身澤山の小さな浪形の塊に細別され、風の強弱に従つて其別かれ方が多くもなり少くもなる。別れ方が單に波動ばかりで濟む場合には、雲は丁度潮の爲めに皺の出来た海邊の砂に似てゐる。之に反して別かれ方が烈しくて、すつかり截斷された時は、所謂「斑空」モット、カラスカイ又は「鯖空」マツレ、カスカイとなる。普通横筋の別かれ方が大きければ大きい程雲の列又は團體が一層廣くなり、一層形を崩す。故に斑空に於ては全然其形を失し、丁度羊の群のやうな、同じ大さの不規則な大きな團體が幾つも出来る。かやうな雲は正式の卷雲よりも

三四千尺下である。私はそれが日没の際モンブラン白山の上へ影を落してゐるのを見たことがある。従つて殆んど地上一萬五千尺以内まで下るに相違ない。

第四、色の清いこと。かやうな雲の一番近いもの、即ち見る人の頭上にあるものすら、少くとも三哩は距つてゐる。又普通の視力の範囲内にあるものは、大抵それよりも猶一層遠い。従つてかやうな雲の陰かげつた部分は、他の雲の陰つた部分よりも距離の遠い爲めに、其色合が一層白味がかつて冷かである。此種の雲は汚れた地上の瓦斯を一切含まない最も清い水蒸氣から出来て居つて、然かもそれが有らん限りの極めて輕快な最も純化した状態に於て吾々に見えるのである。その上此雲は下層の

物體よりも遙に強烈な日光を受ける。といふのは此場合日光は遙かに稀薄な大氣を通じて送られ、煙霞其他の不純物に全然影響されないからである。故に其色は他の雲よりも一層清く一層鮮かて其白色は一層純粹である。

最後に、變化に富むこと。變化は均整と結付いた場合に最も眼立つものである。他の雲は其形があまり間斷なく變化する爲めに反つて單調を感じしめる。その上、關係の不分明な時、相違を著しく感ずることは出来ない。然るに若し横筋から出来た一列の雲が天空の半ばを覆ひ、總てが同一の力を以て支配され一つの形に統一されながら、然かも全體を形作る個々の部分の間に著しい明かな不同が存在するとすれば、——甲は他より

も一層精細に描かれ、乙は一層繊巧に形作られ、丙は一層優美に曲折し、各異つた形式を有する數の異つた團體に分裂してゐるとすれば、全體の完全な均整と對照して、其變化が益々著しく見える。従つて吾々の注意すべきことは、自然は其最も訓練ある雲に於ても猶其一部と他の一部とを類似せしめないことである。假令各部は同一の機能を爲すに適し、又其主要な點に於て他の總てと類似して居つても、空を飾る幾百萬の雲の唯一片も、各獨特の美と特色とを具へ、それを意匠する爲めに特種の思想が費され、それを生ずる爲めに特種の力の用ゐられたことを示してゐる。そして各組織の各部分に現はれた此無限の意匠に加ふるに、異つた組織の雲が互に交叉して、縦に長く曳いた雲が、凝固

した横雲と相交はり相絡らみ、横雲は更に溶けて海砂状の畝を爲し、漂浪する不規則な泡沫片となり、更に其下へ多分どつしりとした下層の雲が上層の軽快な不動の雲を横ぎつて重々しく動き、上なる雲の高さを表はすと同時に、其安靜なる様を示すに相違なす。(M. P. I. ii. 3. 2. 2-8.)

三 水

他の補助を受けず他と結合せず、己が本來の性情に従つて活動する總ての無機物中、最も不可思議なものは水である。嚮に

雲に於て觀察したあらゆる變化美象が、其源を水に發すること
を想ふ時、既に研究したる大地をして、其均整の美を整へしめ、其
巖石を優婉なる姿に彫刻したものが同じく水であることを想
ふ時、更に自己の造つた山嶽を纏ふに雪の衣を以てし、親しく見
なければ想像の及ばぬ程の陸離たる光彩を放つ時、急潭激して
泡沫と散り、其上を架する虹霓と現じ、之より立登る朝霧と變じ、
懸崖逆さに映ずる水晶の深淵を湛へ、渺茫たる湖沼、洋々たる河
川となる時、最後に萬人の眼に不屈不退轉力の絶好の表徴たる、
かの狂暴怪異變幻不測なる漫々たる海洋に統一せらるゝ時、此
偉大普遍な一原素と莊麗優美を競ひ得るものが何處にあらう
か。其無限に變化する情緒を何うして捕へることが出來やう

か。恰も心霊を繪に表はさうとすると一般、到底不可能であらう。(M.P.I.ii.5.1.1.)

* * * * *
假令どんな路傍の池や水溜にも、其水上にあると劣らない風景が其水中に存するのである。それは吾々の考へるやうな茶褐色の泥深い死物ではない。それには吾々人間のやうな優しい心があり、其底には高い樹木の梢、風に戦く草の穂、青空より來るあらゆる色彩の變化に富んだ心地よい光を湛えてゐる。否々、穢れた都市の奥深く、下水口に停滯する醜惡なる溝すら、全然賤しむべきものではない。其水中を深く深く覗き込めば、遙か彼方の大空の森嚴深邃なる碧色と、過ぎ行く白雲とを認める

に相違ない。人の賤しむ此流れに、街衢の塵芥を見ると、蒼空の姿を見るとは、見る人の心次第である。凡そ吾々が情れなく排斥する世の事物に於て殆んど皆然うである。(M.P.I.ii.5.1.4.)

* * * * *
疾風が三四日間晝夜吹通した後の海の姿を見た人は比較的少からう、又見なかつた人には全く想像がつかないに相違ない。單に波濤の力又は大さが想像に及ばない許りでなく、海と空との區別が全く無くなつて仕舞ふからである。海水は長時間の振蕩の爲め、單にクリーム狀の泡沫となる許りでなく、堆高い酵母狀の集りと化し、それが或は綱索の如く、或は花環の如く、浪から浪へと懸かり、一つの浪が將に碎けんとして逆巻く時、其端か

ら恰も裝飾様の花綵フエツツイのやうに垂れ下る。此花綵狀の泡沫が風に奪はれる時、粉末となつて四散せず、其形のまゝ曲ねりつ巻きつ垂れ下りつ空に舞ひ、丁度白雪の如く空を立籠め、其一片だけでも一二尺の長さを有する。又下なる波濤そのものが全體泡から出來て居つて、丁度大瀑布の瀧壺の水のやうに底の底まで眞白である。かやうに波濤全體が半ば水、半ば空氣から出來てゐるから、それが逆卷いて立上がる時は、何時も風の爲めに寸々に粉碎され、轟々叱咤する煙となつて運び去られ、之に面した時は實際の水の如く息がつまつて仕舞ふ。其上に若し大氣が長雨の爲めに全く其水分を吐き盡して居るとすれば、海波の揚げる水沫は大氣の爲めに奪ひとられ、海面は單に細く粉碎した水

煙を以て覆はれる許りでなく、沸騰する雲霧に閉される。又私の屢、見たやうに密雲低く垂れて殆んど海に觸れんとし、浪より浪へと雨雲の引裂けたやうな斷片が飛び替ふこともあれば、最後に波濤夫れ自身が此混沌たる最中に強大奔亂狂暴の極大空目蒐けて奔騰し、其上身の勢が激しい爲めに幾多の褶を造りつつ、斷崖となり峻峯となるに到つては、海と空との見境の全然付かなくなる事が分かるだらう。此處に到つては地平線も陸標も其他方向を示す何等の自然物も一つとして眼に這入らない。天空は總て之れ泡沫であつて、大海は總て之れ雲霧である。何れの方角に向いても全く眼界を閉されてゐることは、丁度瀑布に面して立つやうであらう。丁度かやうな時に海を見る機

會を得た人は殆んどない、假令機會を得ても此海に面を向け得る人は少い。橋又は岩石に絶つて之を注視するのは、丁度水に溺るゝのを永く我慢すると同様、大抵の人には忍耐する勇氣がない。勇氣のある人にとつては、これこそ自然の最も崇高な一教訓であらう。(M. P. I. ii. 5. 3. 38.)

四 山嶽

山嶽の大地に對する關係は、丁度烈しい筋肉運動の身體に對する關係に等しい。大地の筋肉や腱は山嶽に於て猛烈に其力

を發揮し、表情と活氣と精力に満ちてゐる。平原及び岡は大地の平靜な運動である。此場合其筋骨は肉體の美しい輪廓の中に隠れて眠つてゐる、然かも常に其輪郭の變化を支配する。そこで之が大地の眞に關する第一の大原則である。山嶽の精神は活動にあつて、平野の精神は靜止にある。して兩者の中間には活動靜止のあらゆる種類があつて、下は幾多の都市を星と抱いて大空の如く眠る平原より、上は其胸を波打たせ四肢を躍らせて、輝く額に雲の前髪を散らし、巨人の手を天に振上げて、「我れ永へに活けり」と叫ぶ火山峰に到るのである。

然し大地の活動と人體とは一つの相違點がある。活動する四肢の骨や腱は肉を透して見えるのであるが、興奮した大地

は全然肉を脱ぎ捨て、其骨を露出するのである。山嶽は大地の骨の露出したものであつて、其最高峯は常に平原に於ては二萬五千尺の厚い地層の下に埋つてゐる部分に相當し、山嶽となるに及んで、着たる土の衣を左右にかなぐり捨て、突出し、巨大なる三角塔又は楔となつて表はれたのである。此山嶽の裾へ一層低い山が凭れかゝつて居るさまは、丁度半出來の橋の鐵骨アーチへ、横に石を積み上げた格である。唯異なる處は山の方では中央の山梁へ低い方の山が斜めに倚りかゝつてゐる。最後に此傾斜した岡の斜面へ、砂礫土砂土壤の平かな層が打敷かれ、之が平野の初めとなる。そこで此點に又一つ大地に關する大原理が存する。即ち山嶽は全體の下より出て、全體の支柱と

ならねばならぬこと。其以外のものは順々に其腕に被ぶさつて行つて、平原が一番上に來ることである。然るに外見上は何時も山が平原の上に置かれたもの、又は其上に築かれたものであるやうに見える。そして此事は單に大地を大きく見ての談ではなく、どんな小さい岩石でも(所在地を動かさない限り)海中から出てゐる島のやうに、周圍の土から抜け出て、島の四邊を洗ふ浪のやうに周圍の土を持上げてゐるのである。(M.P.I.ii.413-4)

* * * * *

山嶽は人類の健康を保全し人類の幸福を増進する爲めに三つの大なる使命を有してゐる。

第一、山嶽は水に運動を起さしめる。之が爲めに人間は常に

豊饒なる沃野の中央に、其都市を建設することを得流れて止まざる水流に沿ひて商業を営むことを得る。

第二、山嶽は大氣の流に絶えず變化を起さしめる。山嶽は單に大地を異つた地域に分割する許でなく、又之を異つた氣候に分ち、大氣の流れをして絶えず其山道を通過し、其溪谷を上下し、其温度並に性質を無限に變ぜしめる。或は瀑布の水煙を以て之を潤ほし、或は急湍の淀みのうちに引入れて、彼方此方に之を震蕩し、或は晝猶暗き罅隙洞窟のうちに閉籠めて、霜月の霧の如く冷却せしめ、懸て又之を吐出して、草滑かなる平野の斜面を柔かにそよがせ、或は烈日に熱せる板泥石形を成さぬ介砂層のうちに之を焦がし、再び氷雪の罅隙のうちに凄じき渦巻立てて吸

收し、水野の空に露深き煙とならしめ、懸て又之を貫くに閃々たる電雷の奇光を以てし、恰も草刈男が乾草を投上ぐるが如く、之を空高く打亂して異形の黒雲となし、遂に大氣が純潔清澄たるに到つて去て遠き平原の汚たる空氣を一新せしめるのである。

山嶽の第三の大效用は大地の地味に絶えず變化を與へることである。山嶽の設備がなくては、今日開墾せられつゝある地面は、幾年かの間に全く其養分を用ゐ盡し、全然之を一變せしめる爲めには大變人間の勞力を必要とするに相違ない。然るに大地の表面が起伏することは絶えず地味を一新するの效がある。高山の頂きは幾多の斷片に崩壊し、巨大なる岩石の板となつて麓に落ちて來る。此岩石には後篇に説く如く植物の營養

に大切なあらゆる物質を包含してゐる。かやうな岩石の片は再び寒氣の爲に破碎し、激流の爲めに播潰されて、種々の體裁の砂土となり、更に之が水流によつて絶えず運搬されて、麓から次第に遠方へ分配される。驟雨來つて細流を氾濫させる毎に、其水は大地の一部分を新たな位置に運び、更に新たな岸邊を崩壊せしめる。怒濤逆卷いて泡を散らし、其狂奔する處土を崩し岩を壊つのは、決して惠深き自然の法則を亂だすものではない。却つてそれは人類の生存、大地の美化の爲めに必要な惠深き自然法の運用である。之と同一の作用は到る處の一層平坦な地方に於て常に一層穩かに行はれて、然かも之と等しい効果を生じてゐる。高原の軟草の間を滴つて、土壤に滲入する夏雨の糸

の一筋毎に各、其命ぜられた土壤の荷を運んで、平地の或る新らしい自然の園へ棄て、ゆくののである。(M.P. IV. v. 7. 6—9.)

五 樹木

自分は今個々の樹木に就いて其特質を研究しやうとは思はぬ。唯總ての樹木に共通した一般法則を觀察すれば足りるのである。處て先づ第一、前に述べた總ての樹木(榿、榆、椴、柳、樺、榲、白楊、栗、松、桑、橄欖、蘋果等凡そ歐洲にある普通の樹木)は其幹も亦枝も、それが分岐する場合を除いて、決して上ほど細くなるも

のでない。幹から大枝が分れ、大枝から小枝が分れ、小枝から芽が出る場合には、常に其幹又は枝が、忽ち其派出した大枝又は小枝の太さだけ自身の太さを減じ、然る後何處までも同一の太さを維持する。若し何か變化があるとすれば、寧ろ更に枝を分岐するまで却つて太くなる位である。此法則は嚴として例外を容さない。如何なる枝、如何なる幹、如何なる小枝も、二股となり芽となつて、其實質の一部分を分割するのでなくば、決して一毫も細くなつて行かない。従つて若し樹木の頂上及び其周圍にある、又は曾てあつた、あらゆる小枝と細枝とを、隙間なくきつしり一つに纏めることが出来たならば、其全體は之を派出した幹と全く同じ太さを成すに相違ない。

然るに大抵の樹木の幹は、柔かな下葉を着けた小枝細枝を派出し、其個々の織緯は丁度其太さだけの要分を母體から取り去り、又其多數が枯落ちて、後に残るのは唯其名残の瘤だけであるから、往々幹そのものが稍、少し先の方で細まるやうな觀を呈する。一方此作用は枝の場合に於て一層廣く行はれる。といふのは殆んどあらゆる樹木の常として、其若枝は自分の維持力以上には澤山な小枝を分岐するからである。之等の小枝は其元枝が太るに従つて分岐點の處で萎縮し、爲めに樹液の流が止まり、やがて枯死して落ちて仕舞ひ枝の到る處に此方彼方と順々に幾多の小さな瘤を残す。従つて其枝が先きへ行くに従ひ細まる譯であるが、其實其細まり方が随分僅かであるから、今假りに

枝のうちで本當に二股となつて其太さを分つとか、現に小枝を分岐して其太さを減ずるとかいふことの無い枝を選んで見ると、先へ行つて細くなるといふことは殆んど肉眼で見分けがつかない。又過去に於ける小枝の分岐を示さない枝にあつては、全然之を發見することが出来ない。

併し自然は非常な注意と骨折を用ゐて、樹枝に於ける此一般法則を隠さうとしてゐる。樹枝は絶えず小さな枝を此處彼處に分岐して、窈と人眼につかぬ處で其容積を盗んで置くから、少し上へ行つて見て太さの減じたとに氣がつく。更に樹木の上部に到ると、分岐が甚だ頻繁に且繊細に行はれてゐるから、見た眼には丁度枝が現に先きて細くなつたやうに感ずるのである。

勿論折々貪慾な枝があつて獨り養分を貪り、六七尺の間少しの枝も分岐しないでゐることもある、併しかやうな枝は醜い感じを與へる。

従つて樹枝は現に先程細いやうに描いて可い又描かなければならないが、併しそれは其樹枝が葉や小枝を出してゐる場合又は遠方にあつて、個々の分岐が眼に映じない場合に限る。更にかやうな場合に於ても、其細くなり方が決して急激ではない。假令すらりと細く見える枝でさへ、其直徑の十倍の長さに對し直徑の十分の一以上を失ふことは減多にない。之より以上細くなる爲には現に分岐が行はれてゐなければならぬ、又分岐の度毎に屹度一段一段と細くなるのである。(M.P.I.ii:6.1.2—5.)

* * * * *
樹葉の特色の中で、最も注意すべき一性質は、それが小枝の上に整然と甚だ規則正しく排列されてゐるにも係らず、其整然たる排列が吾人の眼には亂れて映ずることである。凡そ樹葉が一叢を爲す時は、或るものは横さまに見えて單に長い線を作り、或者は正面に短く見え、或るものは互に交叉し、總ての葉が互に他の葉とは異つた向き方異つた位置をとる爲め、元來同一の形を有する樹葉が、集合すれば無限に異つた奇妙な形を呈する。その上一つの葉の影が他の葉に映じ、全體の姿を更に一層變化紛糾せしめる爲め、結局眼に映ずる處は、無數の形式の、優美な變轉自在な混沌たるに過ぎない。そして此處彼處の端に完全な形

の葉を表はしたり、又は一二の葉に於て均整的聯合を示してゐるが、それとても樹木の種屬性を明示し、全體に對して統一と趣致を與へるに足るだけで、一方の葉の群をして他の一群と形を類似せしむるに足らない。従つて之を見る者は、部分の構造は如何程規則正しく數學的であつても、其部分から生じた全體は自然の作業の何れに比べても劣らぬ程變化的無限的であると感ぜざるを得ないのである。然かも之は樹木を大きく見ての場合許りではない。試みに葉の叢つた榆樹の枝を三尺許り折取つて、之を眼前の卓上に置いて、葉を一つ々々寫して見玉へ。十中八九其枝全體の中に、諸君は全く同一の形をした葉を見出すことが出來ない。否、一つとして完全に葉の形を見ることは

出来まい。總ての葉が或は斜めに向き、或は正面に短く見え、或は捲き上がり、或は交叉し、或は他の影に覆はれ、何か故障がないことはない。そして枝全體は優美に均整的に見えても、一つの線として同じものがないのにどうしてそんなに見えるか、何故そんなに感ぜられるか、殆んど解釋に苦しむだらう。

(M. P. I. II. 6. 1. 16)

六 草

希臘人が草を喜んだのは嚮にも言つた通り其實用の爲めてあつた。中世紀並に近世の人は其色彩其美しさの爲めてある。

けれども兩者共に草を以て美景の第一要素とする點は同じである。人類の此大本能にはどれだけの深い意味があるか少し考へて見たまへ。試みに草の葉を一つ把つて、其莖に溝のある狭い劍形の細長い姿を暫時注視して見る。之と言つて良い處美しい處は一つもないやうである。力も強くなく丈も高くない、そして僅の優しい長い線が一點に集つてゐる、其點も決して完全ではなくて鈍い仕上の足らない尖がり方で、自然の細工の標本としては決して立派なものではなく又手の行届いものは思はれない。單に今日踏みにぢられて明日は竈に投げ入れられる爲めに出来てゐるやうに思はれる。そして小なさ色の褪めた空洞の莖は弱く軟で、其尖端は濁つた茶色の幾筋かの根

となつてゐる。けれども夏の風に輝くあらゆる華麗な花卉や、
眼に快く食らふに甘いあらゆる強い立派な樹木——亭々たる
棕櫚と桐、頑丈なハコヤナギと檜、香の高いシトロン、たわゝに
實る葡萄——の内でも果して此弱々しい緑の草よりも一層深く
人に愛せられ、一層高く神に恵まれたものがあらうか。深く考
へ正しく判断して見たまへ。基督がかの總ての奇蹟の内でも
も人々に感動を與へた奇蹟即ち麵包の奇蹟を行はうとする時
に當つて、人々に命じて、緑草の上に「一團づつ坐せしめたといふ
ことは、何か特別の意味があるのではないかと私は考へる。彼
は今や海陸の主要な産物、人類食料の最も單簡な代表物を以て
人々の口を潤ほさうとしてゐた。彼は人々に草の「實」を與へた。

そして其爲めに先づ草其物の上に坐せしめた。草に實つた果
實が彼等の生命の糧であるやうに、草そのものは喜と休安を與
へる點で同様の貴い賜であつた。かくの如く此一つの命令一
つの行爲は正當に理會すれば、天地の創造者が人間の愉快と慰
安と營養を地上の草木類の最も單簡な最も卑しいものに托し
たことを永遠に示してゐる。而して又草は其使命を辱めない。
單に野の草だけでも吾々はどれほどの恩澤を蒙つてゐるだら
う。あの美しいエナメル、あの柔い無數の平和の穂先が黒土を
覆ふといふことはどれ程有難いことであらう。平野！此言葉
の内に吾々はどれ程澤山の思想を認めなければならぬか順
次に考へて見る。先づ總ての夏と春とは此言葉に含まれてゐ

る。静かな香床しい野道の逍遙——正午の暑さを避ける休息
——牛羊の喜び——牛羊を飼ふ人々の生活と冥想の基——日
光が此世界に得る生命(草あればこそ太陽の光は地に落ちてエ
メラルド色の縞を織り、柔かな青色の蔭を生ずるが、さもなけれ
ば黒土や紅塵の上を射る許りである)——流るゝ小河の側の牧
場——低い小山の柔かな堤や頂き——青い海が其上から覗い
て居るサイムの咲いた丘——朝露にけむりてすが／＼しく、夕
日雨の如くに射して暖かく、足軽ろく踏みつけられて笑ふ聲も
閑かに聞こえる芝草。總て以上の事柄は此單簡な言葉のうち
に籠つてゐる。然かもそれが全部ではない。此天與の賜の貴
さは我國に於いてだけでは十分に量り盡す事が出来ない。沙

翁が特種の歡びを感じた草原の無限の美は、考へれば考へる程
益々美しく感ぜられるにせよ、吾々は要するに其の一部分を有す
るに過ぎない。試みに陽春の候瑞西の湖畔から小丘の麓へだ
ら／＼と登つて行く野邊に行け。其處には丈の高い龍膽や白
水仙を交へて青草が延び／＼と心の儘に生じてゐる。そして
花を以て覆はれた梢の下を曲々と山路に従つて行く時——其
路は紺碧の水に臨んだ緑の丘を下りつ上りつ進んで行く、そし
て其丘の斜面には處々に刈立ての草がうづ高く積まれてかす
かな芳香をあたりに放つてゐる——其山路を上る時眼を放つ
て高い山々を仰げば、其處に永遠の緑をたゞえた草の浪が松樹
の蔭の永い入江へ静かに打よするのを見る。そして吾々は恐

らく初めて詩篇百四十七の「神はもろくの山々に草を生へし
め給ふ」といふ静かな言葉の意義を味ひ得るのである。 60

草が特に人間の用に適するのは其れが如何にも謙遜で愉快
氣な爲めである。謙遜とは草が最下等の用即ち踏み付けられ、
食料とせられる爲めに作られたと見えること。又愉快氣であ
るとはあらゆる暴行と苦痛の下にあつて喜色に満ちてゐるこ
とである。之をならせば翌日は反つて生き／＼としてゐる。
之を刈れば恰も刈られたのを感謝するやうに其根を倍加する。
その上を踏めば反つて強い芳香を放つ。春來れば全地と共に
喜び、五彩の花と共に燃え立ち、生き／＼とした豊かな緑の波を
漂はす。冬來れば新緑を誇つて友を嘲けるやうなことはない

が、併し悲哀に沈むことはなく、友の如くに色を失ひ葉を失ふこ
とはない。それは永へに緑であつて霜の爲めに反つて益、鮮かに
に美しす。(M. P. III. iv. 14. 51—2.)

第三篇
詩

一 詩とは何ぞや

「詩とは何ぞや」と疑はねばならぬことは私に奇妙な感じを與へる。多分讀者にも同様であらう。此詩と云ふ言葉は吾々が多年用ゐて來た言葉である。思ふに至極明智な意味を附して用ゐて來た言葉である。處が愈々定義を與へよと言はれると私は躊躇して居る。其上可笑しいことは、右の疑は至極あたり前の疑であるに係らず之まで屢々問ふた人のあつたやうに覺えない。そして返答は勿論、返答しやうとする人さへ無かつた。

と記憶する。普通世人は比喩に隠れて、詩は心靈の言葉であるとか、神性の流露であるとか、自然の聲であるとか、之に類似の高遠且朦朧たる名前と呼んで居るのを聞く。しかしまだ本當に詩を散文から區別する特性を、少しでも明晰に説明したのを聞いたことがない。

私は幾分當惑の末、次の結論に達する。詩とは「高尚な情緒を起させる高尚な根據を、想像の力で暗示すること」、*the suggestion, by the imagination, of noble grounds for the noble emotions* である。私の言ふ高尚な情緒とは四つの重要な神聖な情緒、即ち「愛」「敬」「賞嘆」「歡喜」此最後の情は利己的でなければ特に然りと其反對の四情緒、即ち「憎惡」「憤慨」「又は侮慢」「恐怖」「悲痛」此最後の情は利己的でない

場合「同情」となる。

以上八つの情緒は、それが高尚な根據、委しく言へば雄大眞實な原因に依て感ぜらるゝ時、種々に結合して所謂「詩的感情」を形成する。例へば憤慨の情は重大な傷害に基く時は詩的感情であるが、少しの金額を誤魔かされた爲めならば詩的感情ではない。詐僞の仕方が可なり憤慨して良い程のものであつても、根據が正當であると共に重大でなければ詩的感情と言へない。同様に見事な花火、美しい店の列んだ街を見て、或る人は大した讚嘆の情を起すかも知れないが、その原因が僞であり、従つて卑しいから詩的ではない。實際火薬の包を發火させたり、倉庫の商品を陳列した處で少しも讚嘆に價しない譯である。然るに綻ぶ

了あな情の起す
想像の力と生きた美は如何程讃へても讃へ盡せぬからである。
その上詩が存在する爲めには情緒の根拠を「想像」が供給せねばならない。詩的感情委しく言へば、單に高尚な情緒は詩ではない。詩的感情は幸にも人間と云ふ名の附けられる總ての人の心に宿つて居る。往々極く無邪氣な人に最も純粹に見られる。然し此感情を呼び起すやうな形像を「想像の働きて集める力は詩人 Poet 即、文字通りに言へば Maker (創作者) の力である。」

例へば「マーガレットの歎き」(The Affliction of Margaret) の美しい句を探つて見る。

I look for ghosts, but none will force

Their way to me 'Tis falsely said
That ever there was intercourse.
Between the living and the dead;
For, surely then, I should have sight
Of him I wait for, day and night,
With love and longing infinite.

私は幽霊を捜すけれども一つも私の處へは進んでやつて來ない。何時の世にか生きた人と死んだ人との間に交通があつたなどとは偽の談である。若しそんな事があるなら晝夜思ひ焦がれる彼の姿が私に見えない筈がない。かやうなのを私は詩と呼ぶのである。假想人物の心意を探つて

著者が工夫したものの、創造したものであるからである。次に實際の人間が眞に經驗し、單純に言ひ表はした實際の感情の場合を探つて見る。

「千七百六十四年三月アルセンチエールの氷河を下つて、とある人家に這入つて牛乳を求めた時、會つた婦人程余を驚かした者はない。之より先き此村には赤痢が流行した、そして數ヶ月前此の婦人の父を奪ひ夫を奪ひ又兄弟を奪つた。それが爲今や彼女はまだ搖籠にある赤子三人と唯獨り後に残されたのであつた。彼女の顔には何處か氣高い處があつた。其顔付には靜かな深い悲哀の色が歴然と表はれて居た。彼女は牛乳を與へた後私に何處から來たか此寒い時分に何しに此處へ來たかと尋ねた。私がセネバの者であると知つた時、彼女は私に言ふには「新教徒は皆が皆まで地獄へ落ちる人間である」と信ぜられない。其内には立派な人間が澤山ある、神糧は誰彼の見境ひなしに人を罰するにはあまり慈悲に富んだエライ方

である」と言つた。それから暫く思ひに耽つた後、頭を振りながら言葉續けて言ふには「併し死んで行く者が澤山あるのに獨りも歸つて來ないと言ふことは不思議に思はれてならない。私は」と悲痛の色を浮べながら「夫や兄弟の死を之れ程に悲んで一時もあの人達のことを考へない暇はなく、毎夜祈を上げて何處に何うして居るか聞かして呉れと頼むのですから、若し何處かに生きて居るなら私の頼をそのまゝに打棄て、置く筈がない譯です。けれども多分私はそんな慈悲を受ける資格がないのかも知れませんが。多分此子供達の純潔無邪氣な魂は」と搖籠の方を振り返りながら「その人の姿を見ることが出來、私には與へられない喜を感じることが出来るので、いまいましよう」(Susures, Voyages dans es Alpes 第廿四章)

かやうなのを吾々は詩とは呼ばない。工夫によつて出來たのではなくて、實際の人間の本當の言葉であるから。

處で此の情緒喚起の力は何を基とするかと云ふに、勿論想像

力の豊富を第一とし、次にその想像力を用ゐて、結合の際最も効果の多い、又一の目的に最も適するやうな形像を選択するにある。創才の無い者には眞の詩人が何う云ふ材料を採用するか、それを何のやうに使ふか、それから何のやうな案外な結果を生ぜしめるかは全然考へ付くことが出来ない。従つて詩の材料が確定した性質を有つて居べきもの又常に有つて居るものであると言ふのは空言である。大體から言ふと、詩は散文よりも一層精微な細叙に亘るものである。然し細叙が精微であるから詩的であるとは言へない。それが人の心を動かすやうに用ゐてなければならぬ。例へば本當の詩人でなくては、子を失つた父が家の戸を閉める様子を描いて吾々の同情を喚び起こさ

この言ふは
詩作、心像
いつてもいい
詩とは
如何といふ
山正年、いらない

うとは考へつかない筈である。

Perhaps to himself, at that moment he said,

The key I must take, for my Ellen is dead;

But of this in my ears not a word did he speak,

And he went to the chase with a tear on his cheek.

恐らく其刹那に彼は心のうちで言つた

「鍵を自分で持て行かればならない。エレンは死んだから。」

然し彼は一言も口へ出しては言はなかつた

そして一滴の涙を頬に残して彼は狩に行つた。

畫に於ても同様、大畫家が何う云ふ材料を高尙な情緒を起させるやうに用ゐて詩たらしめるかは、全く豫想することが出来ない。従つて藝術は取材の種類ではなく、その材料の使い方によ

つて優劣の定まることが間もなく分る。

尙以上の問題は、繪畫(painting)を詩(poetry)の反對のやうに考へる輕卒な非論理な風習の爲めに、甚だしく紛糾したことを注意して置きたい。色彩であれ言語であれ、高尙に用ゐれば詩である。繪畫(painting)は説話(speaking)又は筆記(writing)と對立すべきものである。繪畫説話共に思想表現の方法である。詩とは之等の方法を高尙な目的に用ふることである。(M.P.III.iv.1.12-15.)

二 創作力

總ての大藝術家は筆をとつて描かぬ先きに自分の描くものを見る。全然受働的に見る——どうしても見ずに置けないのである。心の中で見るか具體的事實として見るか、どちらでも構はない。想像力に富んだ人には往々心中の幻像は具體的光景よりも明瞭なことがある。併し何れにしても眼前に一個の幻が彷彿するのである。光景、人物、事件が見たいと思つても思はなくとも眼前を通過して、見る通りに描かんことを要求するのである。彼等は之れを文章とし畫とする際、其光景に威壓されて一點一劃を變更するだけの勇氣さへない。彼等にとつては其幻は種類と程度に多少の差はあつても、常に事實の幻影又は啓示であつて、心中にはかの「汝はその實際に見たる處事物のあ

るがまゝを書き記すべし(黙示録一の十九)といふ言葉に相應した感じが屹度伴つて起るのである。

畫家たると詩人たるとを問はず、所謂理想的の事物を正しく描く爲めには、それが彼にとつて理想ではなく實在物と感ぜられねばならない。現在眼に見える光景、或は心中に現はれる光景を寫さなくては立派な藝術は到底作れない。過去に於ても未來に於てもさうである。希臘の藝術又は其他の藝術に於て、吾々から見て虚偽であり空想的であるから理想だと呼んでゐる作品は、實は其の作者にとつては眞の實在物であつた。フキデアスの彫刻した英雄は單に彼が日常見た人間の描寫に過ぎないし、フキデアスの彫刻した神は心から存在すると信じ又實際心

中で目撃した氣高い神々しい人物の描寫に過ぎない。従つて私は自著「建築の七燈」の第二の緒言に言つた、總ての大藝術は見、又は信ずるものを寫す。見ず又は信ぜぬものを一つも寫さない。

大藝術は常に見、又は信ずる事物の描寫である爲め、總ての高い理想畫には上に注意した殆んど見誤ることの出来ない特徴がある。即それが如何にも實生活から寫されたやうであつて、思ひもよらぬ平凡な材料が其内に含まれ、若し具體的事實又は心中の幻影を寫さなかつたら、到底用ゐもしないし考へつくことすら出来ない、精密な特種の描寫を包含してゐることである。例へばダンテの描いた半人半馬の怪物カイロンが口

を開く前には先づ其矢て髻を分けると云ふ事は、若し實際半人半馬の怪物が左様するのを見なければ到底人間に考へつけな
い事柄である。似而非理想派が一生涯かゝつて人間と馬との
美しい姿を種々工夫しても、到底かやうな事は夢にも考へつか
ない事である。然るにダンテは眞實生きた半人半馬の怪物が
現に眼前を歩いて左様するのを見たのであつた。

かやうに實物を寫す爲め、大なる理想藝術家は似而非理想派
が「卑俗」と考へるやうな材料に何でも構はず手を付ける。否、構
はず手をつける」と云ふ言葉は語弊がある。偉大な藝術家は此
點に撰擇の自由を有たないのである。彼等は自分の描寫が卑
俗であるか卑俗でないか知らない。又そんなことに頓著しな

い。彼等は現にそれを目撃したのである。それは事實である。
若し彼等が描かうとする材料を拵へ上げたのなら、勝手に或る
部分を棄て或部分を附加することが出来たかも知れない。併
しそれは拵へ上げたものでなく、既に出来上つて現はれたので
あつた。彼等は甚だしくその光景に打たれて、その内の何處が
卑俗で何處が卑俗でないかと云ふことを考へる間がなかつた。
半人半馬の怪物にそんなに澤山髻があるといふことは大に間
違つたことであるかも知れない。けれども現に事實がさうだ
つたのである。それ故詰らぬ下らない事物を大膽に述べたり
材料としてゐることは、藝術を即席に鑑定する際最も確實な標
準である。詰らぬ下らないと云ふことは詰らぬ下らない人間

にとつての談である。偉人の手に用ゐられる時には眼前に嚴然として存在する氣高い光景の一部分を明白に形成するのである。例へば優れた詩に於て第一章にも述べたやうに、どれ程日常の平凡な言葉を使つても大詩人はそれをものにする、寧ろ言葉の方から働いて呉れる、そして他の言葉では到底出來ない仕事をする。

理想は到る處に存在するものであつて、偉人の眼から見れば事物に大小の差別はない。偉人は公平無私な眼を以て同時に世界の全體を受入れる。かやうな神の如き廣い偉人の心に同情し得ないのは、生れつき本當に心が卑俗であるか又は教育に缺陷がある著しい徴候である。假令これ程の偉人でなくとも

眞面目な人の作品には常に此神のやうな精神が或程度まで現はれてゐる。一般の人に卑俗と見えることを始終取扱ふのは其作家が眞面目な偉大な人であることを示す明かな證據である。品性が高ければ高い程卑俗といふ言葉は意味が無くなつて來る。卑俗とは何か。ウキリアム、ハントの描いた、日曜の晴衣を著て緑と赤の針指から針をとつて他處行きの帽子を留めてゐる馬小屋育ちの百姓の娘が卑俗であるか。否さうてはない。彼女は最高の天國へ人より早く行きついて今後永久に大空の星の一つとして輝くだらう。獨りこの百姓娘が卑俗でないのみでなく、かの繻子の胸當をして腕の美しさを見せる爲めそれを階段の欄干へかけ、眼の美しさを見せる爲めにそれを空

へ向けてゐる貴婦人、禽獸を嚇かす爲めに鐵砲を振り廻はし人間の眼を悦ばす爲めに立派な身装を見せびらかす狩獵紳士てさへ、大畫家は寧其心事の淺薄浮誇なのを憫んで之を卑俗とせず悲むべきものの一つと考へてゐる。かゝる人物が何人も赤面せねばならぬ程卑しく見えるのは劣等な畫家の手にかゝつた時である。

此卑俗といふ問題は少くとも藝術上平明簡潔に説明し去ることが出来る。如何程平凡でも眞の全體を捕へた場合(a whole truth)は卑俗ではない。成程その眞が重要ならざる眞、厭ふべき眞であるかも知れない。けれども決して卑俗ではない。卑俗と云ふ性質(vulgarity)は唯眞の隠蔽、又は嬌飾にのみ存するので

ある。

ホーマーには幻影は單に幻影として現はれないで選擇が伴つて来る。幻影は選擇された順序で現はれる。自分の力で選擇したのではなく、自分の爲めに選擇されて現れる。丁度清い美しい人が清い美しい夢を見るやうである。其夢は歴然とした巧妙な選擇に満ちてゐる。従つて或意味に於てその人は自分の夢を選択した或は作つたと言つてよい。併し其人には唯之れより外に夢の見やうはないのである。之と全く同様に本當の創作力を具へた人の作品は丸で巧妙な法則に基いて作り出したやうに立派な調和を示してゐる。併し作家自身にはさういふ形で自然に現はれて來たのであつて、彼の意志も知識も

人格も暫くは何の役にも立たなかつたのである。彼は單に書記となつて自分の聞いたまゝ見たまゝを記したに過ぎない。

84

之に類した事を規則や工夫でやらうとしたり、此幻影の最初の順序を修正又は變更しやうとするのは創作的ではない。否寧ろ創作力を無視し排斥するものである。今若し人が畫布の上に描かれた形を見て、少し修正すれば良くなるとか力が添はると理智の判断に訴へて決するなら、それは單に非創作的であるのみならず寧ろ創作を壞はすものである。創作とは或る形或る姿が描かるべき順序に自然に心中に浮んで來ることではなくてはならない。従つて規則の知識、判断力の運用は空想の流れを阻害し攪亂する傾向を有つてゐる。其結果として、藝術家

が規則の知識に富めば富む程その人は非創作的であるし、藝術家が偉大であればある程、創作力に富めば富む程、その人は規則を知らない。勿論規則を輕蔑する譯ではないが、自分と規則との間には何の關係もない——夢は規則で律する譯にはいかない——來るがまゝに捕へなくてはならぬ、來る姿のまゝでなくては捕へやうがない、無意識的の幻影を規則で變更しやうと試みるのは、虹を型へはめたり、蝶を留める爲めにその羽翼へ刻目をつけるのと同様に困難であると感じるに過ぎないのである。

大藝術家は自分の仕事の方法や理由を全く知らない。彼は規則を有してゐない。規則の性質を了解することが出來ない。普通は自分の爲す仕事のうちで何が最も善いか何が最も悪い

85

かすら知らない。善悪は彼に同様である。善でも悪でも兎に角言はなくてはならない事、爲なくてはならない事である、甲と乙とに優劣なく、と云つて甲乙何れも大した價值があるやうに彼には思はれないのである。何んな藝術に於ても、規則を彼是言ひ出すが最後、その人は第二流の人である。若し規則を喧ましく言ふなら第三流か或は全然藝術家でなす。(M.P.III.iv.7.5—11)

三 大藝術家の特色

詩人的藝術家たると歴史的藝術家たるとを問はず、凡そ最大

なる偉人は全然其時代に住み、彼の最も優れた作品は彼自身の時代を材料とする。之は不變の法則である。ダンテは十三世紀の伊太利を描き、チョーサーは十四世紀の英國を描き、マサッチオは十五世紀のフロレンスを描き、チントレットは十六世紀のヴェニスを描いてゐる。彼等は皆あらゆる時代錯誤や小さな誤をしながら、生きた現在から常に生きた眞を捉へてゐる。

併し沙翁は前世紀の事柄を種として完全な史劇を書いたと言ふ人があるなら私は答へる。沙翁の史劇は少しも時代を構はずに古今東西の人が認めて不變の人世とする世相を描いてゐるから完全なのである。併し之れは沙翁が普通の眞を與へやうと努めた爲めではなくて自分の周囲の人々を正直に正確

に寫して不變の人情を捕へた爲めである。十五世紀の悪黨は其心情に於て十九世紀の悪黨、十二世紀の悪黨と變りはない。同様に正直な人武勇な人は他の時代の同種類の人に等しい譯である。従つて之等の大理想家の作品は何時も普遍的である。普遍的とはそれが個人の描寫でない爲めではない。否寧萬世を通じて同一な心を其底まで完全に描寫する爲めである。之に反して劣等な理想家の作品は普遍的でない。普遍的でないとは個人の描寫でない譯ではないが、唯其描寫が徹底しない爲めである。心の底まで達せず、外面即ち風俗や衣裳に止るからである。例へばチントット沙翁は二人共單に當時眼に映じた通りにゴニス人英國人の性質を底まで描く。従つてそれが

萬世を通じて變らない。けれども彼等は其史的作品中に過去の思想習慣の特別な型や調子に自分を當嵌めやうとは決してしない。のみならず私の知る限りでは完全に偉大な人に決して此事がない。

假りに彼等偉人の現在が無味乾燥であつたら、彼等は何うしただらうか。之は疑問である。私の考へては第一彼等は存在しなかつたに相違ない。偉人は彼等の取扱ふべき材料と共に生ずる。國民の氣力は其歴史家と共に消長する。ヘロドタスはマラソンの戦塵より生ずる。(M. P. III. iv. 7. 19—21)

四 十九世紀の代表的 詩人——スコット

讀者諸君はスコットを以て時代の文學的精神を代表する偉大な代表者であると私が言ふのを聞いて定めし驚かれるだらうと思ふ。ワーズワーズの深邃透徹を味ひ、テニソンの富麗玲瓏を認め得る人は、スコットの詩——彼が青年時代の空想を吐露せん爲めの作り放しの、勝手な韻律を用ゐた詩——を二人の上位に私が置くのを見て怒るだらう。又佛蘭西小説家の巧妙な解

剖に親んでゐる人、幾分にも獨逸哲學の影響を受けた人は、バルザックとゲーテとを出した時代に歐洲の文人の最高位にスコットを置くのを見て同じく憤慨するであらう。

私は眞に偉大な人物の第一の資格は其謙遜な點であると考えへる。私の言ふ謙遜とは、自分の力量を疑ふとか、自分の意見を述べるに躊躇すると云ふ意味ではない。彼自身に爲し且言ひ得られる事と彼以外の世界の言ひ且爲す處との間の關係を正しく判断の出来ることを指すのである。偉人は常に自己の本分を知るのみならず又之を知ることを知覺する。そして其大體の意見が正鵠を得て居るのみならず、普通正鵠を得てゐることを知つてゐる。唯彼等はさうかと云つて自己を偉大である

** they have a curious under
sense of knowlessness,*

とは考へない。アルノルフオは自分にはフロレンスに立派な堂宇を建築する力があると知つてゐる。アルバート・デュラは自分の作品を貶した人に向つて平然書を送つて、之より好くは誰にも出来ないと云つた。サー・アイザック・ニュートンは自分が他人の誰でも閉口するやうな問題を一二解決したことを知つてゐた。唯彼等はさうかと言つて、人が眺いて自分達を拜することを望みはしない。彼等は自分達が偉大であるのは自分に具はつてゐるのではなくて、自分達を通じて現はれるのである。自分達は神が命じた以外のことを爲すことも出来ず、神が作った以外のものと爲ることも出来ないと感じて、不思議に自己の無力を悟つて居る。彼等は誰に會つても皆その人が

一種神々しい、神の手に成つた性質を具へて居ることを観察し、従つて無限に馬鹿らしい程に、又信用の出来ない程に他人に對して慈悲深いのである。

處で自分の知つて居る限りではこの性質は現代の人々のうちで殊にスコットとターナー(彼等兩人許でないかも知れない)に著しく表はれて居る。スコットが文學の威嚴を語つたり、ターナーが繪畫の品位を喋々するのを私は見受けたことがない。彼等は止むを得ない爲めに自分の仕事をする。話は語らなくては何げない。色彩は施さずには濟ませない。それが他人の氣に入るなら可い都合である。氣に入らなければそれとも別に構はない。

然るにワーズワースやゲーテの談話を讀む人は、彼等の自己に對し自己の作品に對する評價が甚だ異つたものであることを感ずるであらうと思ふ。極く僅かでも嫉妬又は己惚れが見えて居れば、其人の智力が第二流であることを示すに十分である。そして恐らく殊にゲーテにあつてはかゝる傾向の表はれ方が少くもなく又稀れてもない。

大體に於て偉人は謙遜であると共に又全然氣取ると云ふことがない。言ひ換へれば、人の注意を引く爲めに特に或る様子や舉動を其作品に装はない。偉人が有僻者でないこと云ふのではない。スコットの詩句には甚しい僻が表はれて居る。又ターナーの畫もさうである。けれども此種の僻は二人の生れつ

きの感情に餘義なくされたものであつて決して見せびらかす爲めに誇張したのではない。然るに他の文藝上の作品に到つては今日幾分でも氣取つた處のないものはない。恐らくワーズワースは屢、單純を氣取りバルザックは巧緻を氣取つて居る。又優れた佛蘭西の作家は態と言ふべきことを言はずに置いて文章の配置に見物人の眼を驚かさうと考へて居る人が多い。獨逸の作家に到つては氣取らない文章が一つでも見付かれれば運の好い方である。

第二に、偉大であるか無いかを試めず今一つの重要な(全然大丈夫とは言へないが)點は屢々前にも言つたやうに、如何にもすら／＼と容易にものを成就する力の見えて居ることである。

或はダンテ及レオナルドの場合の様に作品に念が入れてある
爲めすら／＼と出来上つたやうな感じを打消すことがあるか
も知れない。けれどもスコット、ターナー、チントレットの場合
のやうに、容易く出来たと云ふ様子が明かに見え、しかも出来上
つたものが甚だ立派である場合には、仕事に骨が折れることを
自白する人々より彼等を一段高く考へなくてはならぬ筈であ
る。スコットは朝飯前に一二章を書いて二度と訂正しないし、
ターナーは狩獵に出かける日の朝の内に一箇の畫を書き上げ
るとすると、何時も其章や畫が好いと假定して、此二人はかの終
日作品と相對して朝から晩までに少しでも修正が出来ればそ
れて一日の勞を報い得たと考へる人々よりも一段高く考へる

に躊躇は出来ない。勿論仕事を早く片付け、擲り書き走り書き
をして偉らい風をしやうと思ふのは入らぬことである。假令
何れ程時間がかゝらうと、好い立派なものを作り出さなくては
ならぬ。けれども出来たものが好い立派なものであつて而か
も少しの努力もなしに正直に氣取らずにやつたとすれば、その
方が一方の骨折つて作つた結果よりも多分一層立派で一層好
いに相違ない。

次に此二人が作つた作品の種類に關して言ふのであるが、私
はそのことを考へれば考へる程人間の魂が此世で爲す仕事の
内の最も大きな仕事は何物かを見ること、そして「見たこと」を平
明に語ることであるといふ結論が益々染々と心に銘じて來る。

語ることの出来る人千人に對し、考へることの出来る人一人、考へることの出来る人萬人に對し、見ることの出来る人は一人である。明かに見ると云ふことは詩であり豫言であり宗教である——又其全部である。

處て文學界は多少考へる人と見る人とに分れて居るから、文學者中の「見る人」は全然考へる人よりも優れて居ることを發見するであらうと思ふ。勿論眞の思想家であつて其人の考が實際を目的とし且誠實である場合には、例へばプレート、カーライル、ヘルプスの如きは、幾分見る人の資格を具へ、常に其時代にとつて無限に益を與へる。けれど自ら思想家を氣取つて、自分の考へる處は實際上の目的以外に何か重要な點があると考へる

人は、凡そ業務に従事する人の内で最も下らない事を爲る人である。加之哲學者思想家などと言ふ連中は、大體から見ても、世間に最も迷惑を與へる連中である。暴君とか悪人とかは人に服従を教へ憤慨を起させる點で多少有用な人間である。そして根からの怠け者は怠け者の例を世間に示し、他の怠け者に自分の間違つた寢言を傳へる點で害がある許りであるが、忙しい哲學者と云ふ奴は何時も正直な働き者を迷はして、社會の仕事の滑かな齒車へ蜘蛛の絲をからみつける。だから凡そ譯の分つた人は成丈け蜘蛛のやうに、又ケムブリツヂシャ運河に生える眼のつんだ雜草のやうに、又其他一切の仕事の邪魔物のやうにかう云ふ哲學者を拂ひのけて行かなくてはならぬ、そして若

しかやうにして現代の文學から哲學的要素を拂ひのけて仕舞ふと、其容積は著しく減少するだらう。従つて其跡に残つた著者や埋草を引抜かれて小さくなつた著述家の要求は一層容易に満たすことが出来るだらう。(私が哲學の悪口を云ふのは、哲學に興味を有たない爲めてないことを御承知願ひたい。哲學を貶すと、人は學者の資格のない男だと言ふ。けれども私は哲學に就いて然う言はれる筈の人間ではない。哲學に通ずる人は誰でも私がその方面に強い嗜好を有することを知つてゐる。そして其嗜好は或は遠い昔に私を其方面に踏み迷はしたかも知れなかつた位であるが、幸ひにして私は尙又自分の手と眼と足の用ゐ方を知つた爲め邪路に踏み迷はずに済んだのである。)

第三 バイロン の詩を筆頭として、情緒の解剖描寫を事とする多數の感情的文學は、單に見たまゝを描く文學よりは全然下級

にある。眞に見る人は深く感ずる點に於て何人にも負けぬ。けれども餘り自分の感情を描寫するものではない。彼は、誰に遇つた、其人が何んと言つたと告げる。そしてそれだけで其人が何んと感じたか又自分が何んと感じたかを讀む人に想像させる。一般に言ふと感情的著作、感情の丁寧な説明は、人が言つたこと、爲したことを平明に記録するのに比べると、或は人が言ひさうなこと、爲さうなことを正しく想像するのに比べると、甚だ容易な仕事である。何となれば一つの話を工夫したり、談の一部分を巧みに完全に述べる爲めには、夫に關係ある總ての人物の全精神状態を把握する必要がある。そして其人物が起り來る事件によつてどのやうに動かされるかを正確に知ること

を要する。之れを爲すには巨大な智力が必要である。けれども個々別々の情緒を細密に描寫する爲めには自分てそれを感じればよいのである。甲又は乙の高尙な情緒を感じ得る人萬人に對して、卓子の向ひ側に坐つた人の總ての感情を了解し得る人は一人しかない。夫故假令此感情的文學がバイロン、テニス、キーツの文章の如くに第一流である場合でも、それを創造的作品と同列に並べては可けない。狭小な範圍で完全に達したものは、恐らく廣大な範圍で完全に達したものと同様に稀であつても、そして又第二のイン、メモリアムを得ることは第二のガイ、マンネリングを得ると同様に困難であるとしても、ブレードルとマンネリングが晚餐の車を距て、語る數句の言葉を正

しくスコットが創造し得たことは、自己の感情を解剖したテニソンの詩の最も優婉高潮な音律よりも一層偉大な智力の表はれたものと斷言するに私は躊躇しなす。(M. P. III. iv. 16. 23—29.)

五 感情的錯誤 (Pathetic Fallacy)

理窟ばい哲學者が作り出した言葉の内て最も不都合な二つの言葉即ち「主觀」「客觀」といふ言葉が近頃頭の悪い獨逸人や氣障な英國人によつて盛んに用ゐられる。

此二つの言葉ほど何處から見ても下らない言葉はない。私

が此ことを此處に述べるのは一撃の下に自分の面前及讀者の
面前から此邪魔者を永久に一掃して了ひたい爲めてある。併
しさうするには此二つを説明しなければならぬ。

或る哲學者は曰ふ。「青」といふ言葉は人間の眼が晴れた空又
は龍膽りんとくの花を看て受ける色の感覺を意味すると。

哲學者は進んで曰ふ。此感覺は眼を其物體に轉じた時のみ
感ぜられるのであつて、誰もそれを眺めない時物體は然ういふ
感覺を生じない。従て其物體は人が見ない時は青ではない。
かやうな理由で事物には物夫れ自身に有する性質と同時に物
以外の何物かに基する性質が澤山ある。一物が甘からん爲め
には味ふ人が必要である。それは味ふ人がある間のみ甘い。

若し舌が味ふ力を有たなかつたなら、砂糖は甘味を失ふに相違
ないと。

然る後彼等は聲を合して曰ふ。かやうに吾々が事物を知覺
する爲め、心が事物によつて動かされる爲めに生ずる事物の性
質は、主觀的と稱すべく、事物が他と關係なく常に有する性質、例
へば圓い形、四角な形の如きは之を客觀的と呼ぶべきである。
此巧妙な議論から一步を進めて次の議論に移るのは容易で
ある。事物は夫れ自身が何であつても構はない唯吾々にとつ
て何うあるか、大切である。事物に關する唯一の眞事實は吾
々に對する其姿、吾々に及ぼす其結果である。更に哲學者は
人を烟にまきたい爲め又我意、我欲、淺薄、生意氣を振り廻はした

い爲め、尙一步を進めて次のやうに信じ且口外することも容易である。凡そ世界の萬物は自分が之を見之を考へることに基する。従つて見又は考へるもの以外に一物も存在せずと。

借以上の曖昧な面倒な言葉を一掃して了ひたいから言ふ。

「青」といふ言葉は龍膽が人間の眼に起こさせる感覚を意味せず、其感覚を起こさせる龍膽りんとろの力を意味す。此力は吾々が夫を見ると否とに係らず常に龍膽りんとろの内に存在し、假令地球上にすつかり人間が居なくなつても、矢張その存在を續ける。譬へば火薬は爆發の力を有つてゐる。燐寸をそれに點じなければ爆發しない。併し火薬は何時でも爆發が出来る。従つて爆發物と稱する。假令哲學がどんな反對を稱へやうとも此事に全然一

點の間違があらう筈がない。

同様に龍膽は之を眺めなければ青色の感覚を生じない。けれども龍膽は常に青い感覚を起させる力を有つてゐる。その分子が造物主の手によつて永久にさう作られてゐる。従つて龍膽と蒼空とは假令哲學がどういふ反對を稱へやうと永久に青色たることを失はない。若し諸君が此二つを見て青く感ぜなければ、此二つが悪いのではなくて、諸君が何うかしてゐるのである。(或程事物の性質で感覚を勘定に入れなくてはならぬ場合には、異つた人間が同一物から同様の感覚を受けるかどうかは疑問である。けれども假令その爲めにかやうな事實を明瞭に説明することが出来なくても事實其ものに何の變りもない。私が砂糖から或る感じを受ける、そして之を甘味と名付ける。之は事實である。もう一

人が砂糖からある感じを受け、彼も亦之を甘味と名付ける。之れ亦事實である。そして双方に此感じを起す砂糖の力が即砂糖の甘味である。此二つの感じは双方共同様であると言ふは想像する。又實際吾々二人のみならず人類全體を通じて殆んど似て居ると見て差支はないやうである。

108

だから私は斯ういふ哲學者に言ひたい。君等は『客觀的に左様だ』などと喧ましい文句を使はずに、『左様だ』(はがら)と當り前に分り易く言つたらどうだ。又『主觀的に左様だ』などと言はずに當り前に解り易く、『さう感じさせる』『さう私には思はれる』と言つたらどうだ。その方が大體に於て他人に一層解り易い。それに大抵の人には青く見える龍膽が或る場合に自分に青く見えないことがあるなら、其龍膽が青くないとか、青く見えなかつたなどと生意氣なことを言はずに、單に自分は何うかしてゐると言つた方がよい。そして自分の何うかしてゐることは可成早く氣付いた方がよい。君等は火薬を爆發させることが出来る場合、總ての火薬は主觀的に總ての爆發は想像の働きてあると公言せずに、單に自分が出来る悪い燐寸であると氣付き又然う公言するに相違ない。假令萬に一つ間違があつても、う一度經驗して見るまでは之が大體に於て君等の到達し得る最も賢い結論である。

それ故此やうな面倒な不合理な言葉をすつかり吾人の面前から一掃して、氣樂に當面の問題を研究して差支ない。其問題とは、事物の普通の本來の眞實の見え方と、感情又は冥想的空想

109

の影響を受けた時の異常な又は虚偽な見え方との相違である。虚偽の見え方とはその事物が有する本當の力又は性質と全然無關係で、唯吾々が有りとしてそれに附與する姿をいふのである。例へば

110

The spendthrift crocus, bursting through the world

Naked and shivering, with his cup of gold.

放蕩者の蕃紅花が其黄金の盃を携へて、

裸體で慄へながら土の中から飛び出す。

之は甚だ甘く書いてあるが、甚だしい虚偽である。蕃紅花は放蕩者ではなくて雨露を厭はぬ植物である。その黄色は黄金ではなくてサフランである。何故吾々は唯の蕃紅花と言ふよ

りも、かう言つて貰つた方を大變面白く感ずるか。

之は重大な問題である。從來藝術に關する議論に於て眞實でないものは何んなものでも良くない、役に立たない、又結局面白くないことを常に發見した。然るに爰に詩句の内に一つ或る面白いものがあつて而かもそれが虚偽である。それに又平生愛誦する詩を考へて見ると、それが此種の錯誤に満ちてゐて而かもその爲めに益々面白く感ずることを發見する。

尙研究して見ると、此錯誤は二種類から出來てゐるやうである。一は此蕃紅花の場合のやうに、故意の空想に基く錯誤であつて、人に信ぜられたいといふ考が少しも交じつてゐない場合と、一は感情の興奮によつて一時吾々が多少狂的となつた結果

111

起る錯誤とてある。故意に陥つた錯誤は別に談すとして、此處には情緒の強い興奮の爲めに起る錯誤の性質を調べたいと思ふ。例へばアルトンロックに次のやうな句がある。

They rowed her in across the rolling foam—

The cruel, crawling foam.

彼等は漕ぐつ泡冷酷な、のたくる泡を横きつて船を漕ぎ入れた。

泡は冷酷でもなく又のたくりもしない。恚ういふ風に生きた物の性質をそれに與へる精神状態は理性が悲の爲めに狂つた場合である。總て劇しい情緒には之と同一の力がある。劇しい情緒は吾々の外物の印象に一種の錯誤を生ずる。之を私は概括して「感情的錯誤」と呼びたい。

處で吾々は動もすれば此錯誤を特に詩的敘述の一性質であるかと考へ、此錯誤を生ずる心的状態をそれが感情的である爲め特に詩的の心的状態であると考へる傾きがある。けれどもよく探つて見ると、最大詩人は餘りかやうな虚偽を許さない——之を喜ぶ詩人は第二種の詩人であることを發見する。

私の認める詩人は唯二種あるのみで第三種を認めない。そして此二種とは第一種創作的詩人(沙翁、ホーマー、ダンテ)第二種冥想的又は觀察的詩人(アーマウス、キーツ、テニスン)である。けれども此二種共假令類を異にするにしても各其の方面に於て第一流でなくてはならぬ。實に於て第二流の詩に至つては何人もそんな詩を作つて人類を煩すべきものではない。既に最良のものが十分に澤山ある。吾々が一生を費しても到底讀み切れず又味ひ切れない程澤山ある。従つて何人も之より劣等なる作品を以て吾々を煩すことは

文字通りに罪惡である。若い似而非詩人が「私等の書いたものの中にも少しは好い處がある積りです」その内もつと甘く書きたいと思ひます」などと云ふと私は我慢が出来ない。少しは好い處！全然好くないものは全然駄目だ。若し「其内にもつと甘まく書く」積なら何故今日吾々を煩すか。寧ろ斷乎として今まで作つたものを火中に投じて將來の進歩を待つた方がよい。普通には教育ある人で、強烈な感情の動いた刹那に一個の詩情を吐き得ない人はない。又後に到つて人に見せられる程にそれを磨き上げ得ない人はない。けれども譯けの分つた人間はそんなことをして時間を浪費しない。且誠實に詩を受ずる人は、練に落ちる名人の指の牙を餘り能く知つてゐるから、彼に倣つて死んでそれを掻き鳴らさうとはしない。否、それ許りではない。總て拙劣な詩は優れた詩を傷けるものである。拙劣な詩は優れた詩の韻律の新鮮を奪ひ、立派な思想を濫用して陳腐に感ぜしめる。そして大體から言つて甚だ厭ふべく惡むべ

き方法を以て、人世倦退の種を増すものである。一體普通の人間の心に起る思想で偉人が既に最良の方法を以て云ひ表はさなかつたやうな思想は殆んどない。従つて一時たりとも世間の邪覺になるやうな詰らぬ文句を工夫し出すよりは完全無缺な文句を記憶し措摘する方が遙に賢明な遙に慈善的な遙に立派な仕事である。

例へばダンテがアケロンの岸から落ちる亡者共を寫して「枝より落つる枯葉の如く」と言つた時、彼等の輕きこと、弱きこと、受動的なること、又散々となり行く絶望の苦痛を誠によく寫してゐると同時に、一刻も之は亡者であつて彼れは枯葉であるといふ知覺を失はないである。決して一を他と混同することがない。けれどもコルリツヂが

The one red leaf, the last of its clan,

That dances as often as dance it can,

一門中最後に生き残つた唯一つの紅の葉は、力のあらん限り踊りに踊る。

と言ふ時、その葉について彼は病的の、委しく云へば、(其點だけでは)虚偽の觀念を有してゐる。彼は葉が有しない生命及意志を想像する。葉の受働的運動を選擇的行動と混同し、消え行く生命を歡樂と混同し、葉を振はす風を音樂と混同する。併し此の句には、例令病的とは云へ、幾分の美さがある。けれども今ホーマーとポープから一例を取つて見る。ユーリシースの知らない間に、彼の最年少の郎黨エルペノアがサース宮の階上の部室から落ちて死んだ。併し出發の忙しさに取りまぎれて將軍も同

僚も氣づかなかつた。一行は海を横ぎつてキメリアの地に來た。そこでユーリシースは亡き人々の靈を冥府から迎へた。眞先きに來たのが亡くなつたエルペノアの靈であつた。ユーリシース呆れて了つて、丁度ハムレットに見ると同様の悲哀と恐怖の交じつた軽い氣分で單純な驚愕の言葉を以て幽靈に問ひかける。

「エルペノア、何うして御前は此暗がりにやつて來たか。黒船に乗つた私よりも徒歩の御前の方が何うして早かつたか」
之をポープは恚う譯して居る。

O, say, what angry power Elpenor led

To glide in shades, and wander with the dead?

How could thy soul, by ruins and seas disjointed,

Outfly the nimble sail, and leave the lagging wind?

やよ、如何なる恐ろしき力が汝エルメノフを導いて

闇を縫ひ死人と共に彷徨はすや。

如何にして汝の魂は陸と海とを離れて、

脚早き帆よりも疾く、遅るゝ風を後に残し得たるや。

私は讀者が帆の脚が早いとか、風が怠けてゐるといふことに少しも面白味を感じないことを切望する。處て何う云ふ譯で嚮には吾々に愉快を與へた想像が、此場合そんなに苦痛を與へるか。

理由は甚だ簡單である。それは全然感情的錯誤でない。門違ひの感情から出た言葉である。苦悶する好奇心に到底こん

な言葉は出ない筈である。ユーリシースは事實を知らうとする。従つて其刹那に外の事を言つたり、事實でないことを言ふ程彼にとつて不自然なことはない。くだくしい初の三行と最後の比喩はまるで調子の恐ろしく狂つた音楽のやうに忽ち吾々の耳に不快を與へる。眞に想像力を具へた詩人なら到底こんな句は書けたものではない。

斯やうな譯で、虚偽を賞玩する際にも尙或意味に於て眞を重ざる精神が吾々を導かねばならぬことを知る。コレリツヂの虚偽は少しも不快を感じさせない。けれどもポープの方は齒を浮かせる。此上討究を重ねずに私は此問題の主要な點を叙述しやうと思ふ。

人が感情的錯誤に陥るのは、上に述べたやうに、心身が或意味に於てあまり弱くて自分の前にあるもの、自分を壓するものを十分に處置することが出来ない時である。即ち感情の爲めに甚だしく心を動かされたり、曇らされたり、又は眩惑された場合である。そして此状態はそれを引き起こした感情の力に比例して、多少貴い心的状態である。何となれば人が自分の知覺を錯亂させる程の力ある感情を有しない時、其知覺が病的で無い、不正確で無いと言つた處で、何の誇りにもならないし、又大體より言つて情緒が大變強くて知力を制服し、情緒の欲する通りを知力に信ぜさせ得ることは、人間として一層高等な能力資格を有する證據であるから。けれども其時知力も亦之と相當して

甚だ強く、幾ら感情が奮闘しても感情を制することが出来、或はそれと共同が出来るなら、又一層立派な人である。此場合全人格が白熱せる鐵のやうに輝き、然かも尙其力を失はず、又決して蒸發し去ることがない。假令溶解しても決して其重量を減じなす。

それで吾々は三階級を有する譯である。第一は感じないから正確に知覺し得る人。その人には櫻草は正しく櫻草である。何んとなれば彼は櫻草を愛しないから。第二感ずるが爲めに間違つて知覺する人。その人には櫻草は櫻草とは見えなくて、或は星、或は太陽、或は妖精の楯、或は棄てられた乙女と見える。最後に感情の烈しいにも係らず正確に知覺する人。その人に

は櫻草は常に櫻草たることを失はない。その周圍に蝟集する聯想又は感情の如何を問はず、有りの儘の小さい花として理會される。一般に此三階級は(一)全然詩人でない人、(二)第二種の詩人、(三)第三種の詩人として優劣を定めることが出来る。唯どれ程偉大な人物でも、當然心の平衡を破らなければならぬ問題が常に世間にある。それが爲めに彼の人間としての能力が征服されて、不正確な朦朧たる知覺状態に陥り、其結果最高のインスピレーションを受けた人の言語が弱い感情に動かされた弱い人の言語に似て、しどろになり、不明瞭になり、無暗な比喩を用ふることがある。

従つて十分に言ふと四つの階級があることになる。即ち何

にも感じないから従つて正しく見る人。強く感じ、弱く考へ、間違つて見る人(第二種の詩人)。強く感じ強く考へ正しく見る人(第一種の詩人)。人間として最も強いけれども、その自分より一層強い影響の下に置かれて、見るものが無限に高い爲めに、或る意味に於て間違つた見方をする人。此最後の場合は、豫言者的インスピレーションの普通の状態である。

私は各の性質が明瞭に了解されたい爲め、四種に分けたのであるが、勿論此四つは互に關聯してゐて、其境界を明かに認めることが出来ない。そして同一の心もその受ける影響に従つて或時は甲となり或時は乙となる。けれども尙偉人と凡人との差は大體から言つて此精神の動搖如何にある。委しく言へば

偉人は過去、未來、並に彼を直接動かす事物以外及び其周圍の萬事について、知る處あまりに多く、知覺し感ずる處あまりに多い爲め、直接の影響によつて決して動かされない。彼の心は確定してゐる。彼の思想は一定の潮流を有してゐる。彼の行き方は不變である。彼は個々の新しい光景によつて心の平衡を失ふことがない。丁度表面に厚い苔を有する巖のやうに、表面だけは印象に鋭敏である。けれども動かされるにはあまり多くのどつしりとした實質を其内に具へてゐる。凡人は同量の感受性を具へてゐれば、忽ち足を擡はれて了ふ。彼は以前したいと思はなかつたことがしたくなる。涙の爲めに全宇宙が新しい光を帯びる。彼は事物の去來に従つて、或は陽氣となり或は

熱狂し、或は陰氣となり或は感情的となる。従つて大なる創作的詩人は、淺薄な人間がダンテを峻酷と評したやうに、隨分無感覺と考へられることさへある。成程總ての感情を十分に受け入れはするが、然かも彼に思想と知識の一大中心がある爲め、その内に冷かに立つて、恰かも局外者のやうに遠くから自分の感情を観察することが出来るのである。

ダンテは如何程劇しい情緒に動かされた時でも、自分を完全に制することが出来た。如何なる場合にも冷靜に周圍を眺めて、見た處を最もよく天上天下の人に告げるやうな比喩又は言葉を求めることが出来た。けれどもキーツ、テニソンの如き第二種の詩人は、普通感情に壓せられ、或は少くとも好んで壓せら

れながら筆をとる。従つて幾分病的な或は虚偽の表現及思想法を用ゐる。

諸感想が眞實であると知る間は、それから生ずる視覚の錯誤を吾々は不都合と感ぜず、否反つて面白く思ふ。例へば吾々は上に引用したキングスレーの詩句を面白く感ずる。泡の寫し方が虚偽な爲めてなくて、悲痛の寫し方が忠實な爲めてある。けれども言ふ人の心が冷かになるや否や、事實の描寫が虚偽であるから、忽ちかやうな表現は總て虚偽となる。斯やうな比喩的表現を冷かな心で用ゐる習慣ほど文學上厭はしいことはない。インスピレーションを受けた著者が劇しい感情に動かされて、怒れる海の波は己の恥を泡と吐き出すと言つても當を得

てゐる。けれど海と言へば屹度、怒れる波、容赦なき潮、屠り盡す波濤と言はねば氣の濟まないのは最も卑しむべき著者に限つてゐる。かやうな思想の習慣を仰へて、自己の眼を純粹な事實の上へ眺かど注ぎ得ることは、著者の凡手でない一つの證據である。著者はかやうな純粹な事實に若し少しでも著者又は讀者の感情を動かすものがあるなら、それが眞の感情であることを知つてゐる。

波のことを言ふ序に思ひ出したが、絶望した人が自分の屍體は海へ棄て、賞ひたいといふ心持ちを、誰れてあつたか慙う描してゐる。

Waves changing mould, and foam that passed away,

Might mock the eye that questioned where I lay.

處定めぬ波の墳墓過ぎゆく水泡は

何處に横ばるかと我れを索める人の眼を嘲らん。

見たまへ。此處には唯一つの虚偽もなく、又誇長した表現すらない。海波を mound(盛り上つた土)に譬へたのは、單純且眞實に事實を穿つたものである。changing(變化する)といふ言葉は極く／＼普通の言葉である。「過ぎゆく水泡も嚴密に文字通りである。此全文は私の知る限り凡そ古今の詩句の中で全然匹儔を見ない程正確に事實を寫してゐる。通常人は大きな浪がどれ程嵩さの大きな不細工なものであるか明亮に知らない。浪といふ言葉は普通漣波や岸打つ波に用ゐられ、又薄絹や草の波

打つ場合に用ゐられることが多い爲め、波と言つた丈では明確な形を傳へない。併し mound(盛り上つた土)といふ言葉は重い、大きな、暗い、確定した形を表はす。従て何ういふ波を意味するか間違が起らないし、又其の姿を見失ふことがない。それに change-sung といふ言葉は又一種獨特の力を有つてゐる。大抵の人は浪が上下するやうに考へる。併し注意して海を見てゐると、浪は上つたり下つたりするのではないことが分る。浪は變化する。處と形とを共に變化する。が上下はしない。一つの浪が進み進み何處までも進んで行く。或時は低く、或時は高く、或時は馬のやうに鬣を振り、或時は集つて屏風の如く立ち、或時は動搖し、或時は靜かに、然かも尙同一の浪であるが、遂に何物かに打

たれたやうに、何ういふ風にしておか知らないが變化して他の浪となる。

其行の結末は此光景に力を入れ尙完全に寫し出さうとする。即ち過ぎ去つた泡と言ふ。單に「溶ける」とか「消え去る」といふのではなく、波の進むにつれ眼界より過ぎ去るさまを描いてゐる。かやうにして此詩人は出来るだけ海に關する絶對の事實を吾々の眼前に示した後、吾々の感ずるまゝにそれについて感じさせる。そして夫と反對の事實を自ら心に描かせる。即ち移り變らない緑の墳塋と、過去つて行かない銘を刻した白い墓を心に描かせ、それから靜かな墓より靜穩な生涯を聯想させ、消え行く泡より絶望的の生涯を聯想させる。聖書に左の句あり。

「何人をしても彼の骨を動かさむる勿れ」

「サマリアの王に到つては、水上の泡の如くに命を絶たれたり」

併し以上の如き事柄を實際に述べ又は指摘するのではない。其の書きあらはされた文章は全然正確な峻嚴な事實であつて、著者の聡かと抑へた感情は少しも之れに影響を及ぼさない。

Mock (嘲ける) といふ言葉さへ、殆んど例外と云ふ譯に行かない。之は浪を擬人化する意味はなくて Deceive 「欺く」とか Defeat 「挫折せしめる」といふ意味に考へることが出来る。

描寫を純粹の事實にのみ限つて讀者にそれから欲する儘の想像を逞うせしめる文章には一種特別な威嚴の具はつてゐる

ことを示す爲め、尙一二の例を示してもよからう。此處にイリアッド中の著明な一例を掲げる。ヘレンがトロイのスキアン門から希臘の大軍を見渡して、ブライアムに其大將達の名前を告げながら遂に言ふ。

「他の總ての黒眼の希臘人を見受けるが、二人だけは見當らない。その二人とは一人の母から私と共に生れたカスターとポラックスである。彼等は美はしいラケデモンの國から軍に従つて來なかつたか。或は又海原さまよふ船に乗つて來たは來たが、私の恥かしめと嘲りを恐れて戦の内に加はらないのか」と。

然る後ホーマーは歌ふ。

「ヘレンは慙う言つた。併し此二人は既に海のかなた、懐かしい母國ラケデモンにて生命の母なる大地が自分の有としてゐた」。

之れ實に詩的描寫の妙處に達したものである。ホーマーは悲哀の心を以て大地を歌はなければならぬ。けれども彼は其悲哀の情をして大地に關する彼の思想を動かし變化せしむることを許さない。假令カスターとポラックスとが死んでゐても、大地は尙吾々の母である、萬物を生み生命を賦與する母である。之は事實である。事實以外に私は何物をも見ない。讀者は此事實を好きなやうに解すればよい。

カシミール・ド・ボニーの恐ろしい俚語「コンスタンスの化粧」

からもう一つ著しい例をとる。本を手元に持ち合はさない讀者に其末節を了解させる爲め、私は其處此處から數行を引用する。

134

Vite, Anna, vite ; au miroir

Plus vite, Anna. L'heure s'avance,

Et je vais au bal ce soir

Chez l'ambassadeur de France

Y pensez vous, ils sont fanés, ces nœuds,

Ils sont d'hier, mon Dieu, comme tout passe !

Que du réseau qui retient mes cheveux

Les glands d'azur recombent avec grâce.

Plus haut ! Plus bas ! Vous ne comprenez rien !

Que sur mon front ce saphir étincelle :

Vous me piquez, maladroite. Ah, c'est bien,

Bien,—chère Anna ! Je t'aime, je suis belle.

Celui qu'en vain je voudrais oublier

(Anna, ma robe) il y sera, j'espère.

Ah, fi, profane, est-ce là mon collier ?

Quoi ! ces grains d'or bénits par le Saint-Père !

Il y sera ; Dieu, s'il pressait ma main,

135

En y pensant, à peine je respire :
 Père Anselmo doit m'entendre demain,
 Comment ferai je, Anna, pour tout lui dire ?
 Vite ; un coup d'œil au miroir,
 Le dernier. — J'ai l'assurance
 Qu'on va m'adorer ce soir
 Chez l'ambassadeur de France.
 Près du foyer, Constance s'admiraît.
 Dieu ! sur sa robe il vole une étincelle !

Au feu. Courez ; Quand l'espoir l'enivrait
 Tout perdre ainsi ! Quoi ! Mourir, — et si belle !
 L'horrible feu ronge avec volupté
 Ses bras, son sein, et l'entouré, et s'élève,
 Et sans pitié dévore sa beauté,
 Ses dixhuit ans, hélas, et son doux rêve
 Adieu, bal, plaisir amour !
 On disait, Pauvre Constance !
 Et on dansait, jusqu' au jour,
 Chez l'ambassadeur de France.

「早く早く、アンナ、鏡の處へ早く来て、アンナ。時間が遅くなる。私は今晚佛蘭西大使館の舞踏會へ行くのよ。」

御前、此バンドは色が褪めてゐるわね。

まあ皆直きにこんなに駄目になるのね。

髪を留めて置く網の

青色の綿さが具合よく垂れてゐるやうに。

もつと高く。もつと低く。まあお前には何も分らないね。

私の額にこのサファイヤが光るやうに。

下手な人だれ、焦れつたくなるわ。あゝ甘く出来た。

甘く出来たよアンナや。可愛いアンナ。私奇麗ね。

忘れやうと思つても忘れないあの方は

(アンナや私の衣裳を) 屹度入らしやるでしやう。

(あら勿體ない、それは私の頭飾でなくて?)

まあお前、その黄金の珠数はお寺で清めて頂いたのに。

あの方は屹度入らしやる。もしか私の手を――

考へるだけでも息が詰まる。

アンセルモ師に明日懺悔をしなくてはならぬ。

アンナや、どうしやう、皆打ち開けなくてはならないが、

早く、もう一度だけ鏡を見やう。

これで見納め。屹度今晚

佛蘭西大使館で

皆に騒がれるに相違ない。

盤の側でコンスタンスは自分の姿に見惚れてゐる。
南無三！ その衣裳へ火の粉が飛ぶ。

火事だ。逃げよ。希望に酔ふ今
かやうにして一切を失ふとは！ 何！ 死！ しかもこんなに
美くて！

恐ろしい火焰は其腕その胸を食り食らひ、
彼女を包んで燃え立ち、

情け容赦もなくその花顔と、嗚呼

その十八年と、その美しい夢とを食らひ盡す。

舞踏も、歓樂も、戀も、最早それまで。

人々は言つた「可愛相なコンスタンス」と。

そして佛蘭四大使館では

曉け方まで舞踏してゐた。

以上は事實である。善いか悪いか詩人は言はない。諸君が

何う考へやうと詩人は知らない。それは彼の關する處ではな
い。死んで灰となつた娘の死屍は部屋に横はつてゐる。佛蘭
西の大使館では夜明けまで舞踏があつた。諸君は之に對して
好きなやうに考へればよい。

私は原文の三分の一許りを引用したのであるが、讀者が此歌
を通覽すると一節を除いて始めから終りまで唯一言の(所謂)詩
的描寫もないことに氣づくだらう。娘は極く當り前の言葉で
談してゐる。現に女が衣裳を着けてゐる時使はないやうな言
葉は一つもない。詩人は側に立つて、彫像のやうに冷かに、聞こ
えるまゝに彼女の言葉を記録する。遂に運命が彼女を捕へる。
そして將に死の襲はんとする一刹那、一時詩人は自分の感情に

征服せられる。最早彼は單純な事實を記さず、彼の考から見た事實を記してゐる。即ち火焰は飽くことなく、情け容赦もなく食ふと言つてゐる。併し事件は忽ち終つて運命は永へに決着し、詩人は眞といふ冷かな結晶的空氣中に再び退く。彼は全篇を結ぶのに此冷かな事實を以てする。

人は言つた「可愛相なコンスタンス」と。

偕て以上は圓熟した詩的氣分の絶好の標本である。詩人の大なる所以は二つの能力、即ち感情の鋭敏と其抑制とに存する。此事は常に明瞭に記憶して頂きたい。詩人は第一、その感情の力に比例して偉大である。次に、かやうな感情があるとして、その抑制の如何によつて偉大である。けれども此抑制には單に

一定の限界があつて、それ以上に抑制を進めることは人間の情として出来ない。従つて其點に於ては總ての狂想は正當で且眞實となる。例へばアッシリア王國の滅亡はイスラエルの豫言者にとつて冷かに考へることが出来ない。此事實は餘りに偉大であつて餘りに驚歎すべきことである。それは彼を顛倒せしめ、彼を粉碎して混沌たる夢幻の境に入らしめる。全世界は彼の感亂した心には奇怪な聲に満ちてゐる。「レバノンの樅及松柏は汝を見て喜び曰へらく、汝墓に降り行きし故に、我を仇する樵夫は來ることなし」。又夫にも増して神我が前にありといふ自覺は次の大驚倒なしに我慢が出来ない。「總ての山々は汝の前に聲を揚げて歌ひ、總ての木は其手を打鳴らさん。」

併し此の感情は之を正當とする原因があれば甚だ貴いだけに、若し原因が正當とするに足らない場合にはそれだけ賤しくなる。そして冷かな心で單に之を裝ふに到つては到底御談にならない。上にも注意したやうに、普通の拙い文章詩句は十中八九まで此空想的比喻を一種の通貨のやうに採用してゐるから、直ちに見分けることが出来る。併し世には之よりも拙な、少くとも一層有害な文學がある。即ちかやうな描寫を譯分らずに何の感じもなく採用したのではなくて、技術に巧妙な併し不真面目な大家が態々思を凝らして冷かに作り上げた場合である。丁度昔のラバの流をもう一度赤熱に見せる爲めに枯葉をかぶせたり、白熱に見せる爲に霜を覆うたりするのと同様である。

る。

ヤングが清淨潔白な聖者の性格を歌つて敬虔な冥想に沈む時、一時自分を感情に支配させて次のやうに叫ぶ。

Where shall I find him? angels, tell me where,

You know him; he is near you; point him out.

Shall I see glories beaming from his brow,

Or trace his footsteps by the rising flowers?

「何處に彼を見出すべきか。天使よ我れに告げよ。

汝は彼を知る。彼は汝の近くにあり。彼を指摘せよ。

彼の額に榮光の輝きありや。

又は彼の足跡に華開くや。」

此情緒には立派な根據がある。従つて眞實で正當である。

然るに今冷血なボーブが羊飼の娘に言ふ處を聞け。

Wher'er you walk, cool gales shall fan the glade;

Trees, where you sit, shall crowd into a shade;

Your praise the birds shall chant in every grove,

And winds shall waft it to the povers above.

But would you sing, and rival Orpheus' strain,

The wondering forests soon should dance again;

The moving mountains hear the powerful call,

And headlong streams hang, listening, to their fall.

「汝の歩みを運ばず冷風草を拂ひ、

汝の坐する處樹木は集り來つて蔭を作らん。

汝が歌美を林間の諸鳥聲を合せて歌ひ。

風は其聲を乗せて天使の耳に傳へん。

若し汝にして歌はんか、オルフェウスと妙音を競ひ、

驚く森林は忽ち躍り出し、

力ある聲を聞きて山は動き、

急湍は汝の聲に聞き惚れて流れを止めん。」

之は感情から出た言葉ではない。又到底一刻も然うと誤られる氣遣ひがない。之は偽善から出た眞赤な偽である。矯飾に根ざし自然と事實を無視して冷かに主張された明確な背理である。固より感情は時に己を欺くことの甚しいものである。けれどもそれには感情が強烈でなければならぬ。單に戀人に歌はせて見たいといふ男の願ひでは足りない。今ワーズワースの之と甚だよく似た一節を比較して見る。此場合情人は其

女を失つたのである。

Three years had Barbara in her grave been laid,

When thus his moan he made:

Oh, move, thou cottage, from behind you oak,

Or let the ancient tree uprooted lie,

That in some other way you smoke

May mount into the sky.

If still behind you pine-tree's rugged bough,

Headlong the waterfall must come,

Oh let it, then, be dumb—

By anything, sweet stream, but that which thou art now?

女が墓に入つて三年を経た。

其時男はかう歎いた。

「あゝ動け汝小屋よ、かしこの樫の後より、

さらずば古き大木よ根こぎとなつて倒れよ。

如何様にもあれ、かしこの煙の

空に上るさまの變らんことを。

若し尙かしこの松の節くれ立つた枝の後ろに、

勢劇しく瀧が落ちなくてならぬなら、

あゝそれに聲を出さして呉れるな。

美しい流よ、何でもよいから、現在の姿だけは變へて呉れ」

此處には山ではなくとも小屋に動けと言ひ、聞き惚れて流れを止めよとは言はずとも、瀬に音を立てるなと云ふ。大抵同じである。けれど然う考へる人は何といふ相違であらう。此場

合は悲痛の極まじい、とりとめのない語を發して心が安慰を
求めるのである。そしてその事が不可能であると半ば知りな
がら、同時に半ば可能な様に考へるのである。假令之程の悲痛
でなくとも、奇蹟によつて慰安の與へられまいものでもないといふ考を茫然と抱いてゐる。自然は情深い。神は情深い。そ
して自分は今深い悲歎に沈んでゐる。之程の悲歎に對しては
何んなことが起り得るかも知れない。流の音を静め、家屋を動
かす——之位の事は出來さうに思はれるのである。

以上の實例は感情的錯誤に關して私の主張する要點を説明
するに十分であると信ずる。即ちそれが現に錯誤である以上、
どうしても病的状態の精神、比較的薄弱な精神の徴候であるこ

とを免れないことである。假令如何程靈感を受けた豫言者で
あつても、此錯誤は彼の人間としての視覺又は思想が現はれた
事實を受け入れるに堪へないことを示すものである。普通の
詩に於て若し此錯誤が詩人自身の思想に現はれるなら、それを
以て直に彼が第二種の派に屬する證據としてよい、又若し詩人
の想像した人物の思想中に現はれるなら、それを發した感情の
純不純に従つて當不當を定めることが出来る。但し常に其人
物の性格が多少薄弱であることを示す。

名家の手になつた二つの最も傑出した例を擧げる。シエン
ストンのゼッシイ及ワーズワースのエレンは共に男に欺かれ
て棄てられた。ゼッシイはそのあはれな心中を語つて曰ふ。

If through the garden's flowery tribes I stray,

Where bloom the jasmynes that could once allure,

'Hope not to find delight in us,' they say,

'For we are spotless, Jessy; we are pure.'

我が庭の草花の内をさまよふに

曾ては自分の心を引いた美しい紫藤を見ると

花は聲を合はば「私共を眺めて眼を喜ばさうと思ひなされるな。

私共は汚點のない、清淨な身體です」の中しませ。

之に答へてエレンの言葉は何らな。

'Ah, why,' said Ellen, sighing to herself,

'Why do not words, and kiss, and solemn pledge,

And nature, that is kind in woman's breast,

And reason, that in man is wise and good,

And fear of Him who is a righteous Judge,—

Why do not these prevail for human life,

To keep two hearts together, that began

Their springtime with one love, and that have need

Of mutual pity and forgiveness, sweet

To grant, or be received; while that poor bird—

O, come and hear him; Thou who hast to me

Been faithless, hear him;—through a lowly creature,

One of God's simple children, that yet know not

The Universal Parent, *now* he sings!

As if he wished the firmament of heaven

Should listen, and give back to him the voice

Of his triumphant constancy and love.

The proclamation that he makes, how far

His darkness doth transcend our fickle light.

エレンは獨り吐息をもらしながら言つた。

「あゝ何故に言葉と、接吻と、嚴かな誓言と、

女の胸にあるやさしい心と、

男の胸にある賢い優れた理性と、

正しい審判者たる神を恐れる心とが、

何故に此人の世を支配して

二人の心を結付けて置かないか。

二人の心は其初め一つの戀に結ばれ、

互に憐み互に救し、救すも嬉しく

救さるるも嬉しかつたのに。嗚呼あの小鳥、

まあ来てあの聲を御聞きなさい。私を棄てたあなた、

来て御聞きなさい。假令神様の子と生れて

天の父を知らぬ卑しい禽獸ではあつても、

まあ何といふ鳴聲でしやう。

丸て大空に我が聲を聞けと言ひ、

勝ち誇つた節操と愛の聲を

我れに反響せよと言はん許り。

彼は聲高らかに宣言して、小鳥の心は暗いけれども、

吾々人間の消え勝ちな光に優ること如何許りぞと。」

二詩人の想像が眞實で且情愛の深い點に於て、此二の文章は
全く他に類を見ない。けれど描き出された二人の人物の内て
ゼツシイは自然に有るまじきことがあるやうに見える點に於

て、エレンよりも弱い性格である。花は實際彼女を非難はしない。神は花をして彼女を慰める積りであつて、決して彼女を侮辱させる積りではなかつた。若し彼女が正しくその花を見たなら、自分を慰むべき筈であつた。

エレンは之に反して少しの誤つた感情をも有して居らぬ。

彼女の思想には極く僅かの錯誤もない。彼女は丸で感じのないやうに冷靜に推論する。鳥の歌ふ聲が、天に聞えかすと鳥が願うてゐるやうに彼女に聞えても、決して瞬時もそれが眞實であるとは考へない。「丸るて」と彼女は言ふ、私は鳥が決してそんな積りでない^⑤と知つてゐる。けれども實にそのやうな氣がする」と。讀者は詩の其他の部分を調べて見てエレンの性格が終

始此熱情的な然かも透明な力を有する點に於て一貫してゐることを發見するだらう。

以上の如く感情的錯誤はその感情的な處が力であつて、錯誤的な處は弱點であるから、此場合に於ても他の自然な正當な精神状態に於けると同様、眞の權威は少しも損ぜられないことが今あらゆる方面から讀者に明かになつたと考へる。

(M. P. III. iv. 12.)

第四篇 藝術

一 藝術と世評

何百年といふ間、世間に讃嘆崇敬されて來たものには、何處か本當に優れた處がある。之は殆んど間違のない事實であるが、併し其理由は、世間多數の人間の平均智力と平均感情とに、事實優れたものを見分けるだけの力が幾分たりとも具はつてゐるからではなくて、總て誤つた考は矛盾的で、總て根據のない意見は永續しないからである。

従つて立派なものを貶して詰らぬものを褒め立てる氣まぐ

れの考や感情には、長い年月の間一貫した主張を維持するだけの根柢もなく力もないが、之に反して眞に有力な判断者たる少数人が正しい根柢に基いて作つた意見は、何うしても着實であるから、次第に甲から乙へと傳はり、横に廣がると同時に又縦に下へと傳はつて、遂に社會全體の思想を動かすに到り、其根據理由を知り得ない人々に對してさへ絶對的の權威を振ふこととなる。かく首尾一貫した考が矛盾撞着した考を次第に征服するといふこと、之が美術文學上の大傑作の名聲を博する所以なのである。といふのは美術又は文學に於て眞に優れた傑作が下等な又は無教育な人間に幾分でも解かると見做すのは、かやうな傑作に對する侮辱に過ぎない。或る人を本當に了解する

には之と同等若しくは以上の人間を必要とする。之は至極簡單に證明の出来る事柄である。同等以下の人間は讚嘆の餘り其人を買被ぶるか、若しくは一層普通には愚かな爲めに其價値を貶す。併し何れも根據のある正しい評價をすることが出来ない。今は此點を證明するだけの餘裕がないからそれは止めても、此處に可なり明かな事實は、即ち個々としては誤つた考が單に澤山集まつたからと云つて正しくはならない事である。例へば私が美術院^{アカデミー}で一つの畫の傍に立つてゐたとする。そして引續き二十人の見物人が外套の裏や草履の表の詰らぬ機械的描寫を感心して見たとする。此場合に彼等見物人が個人として感心するものを全體として非難するといふのは聞かぬ

談である。又彼等が高遠な着想や完全な真に對して、それが筆先の手品や浮誇な表現を缺いてゐる爲め、眼も呉れないで通り過ぎる場合、彼等が個人としては輕蔑しながら全體としては尊敬するとか、或はかやうな批評家の感情や知識が年月の経過又は思想の比較に連れて、美術上の本當の傑作に對して幾分ても正しい議論に達し得られるなどと言ふのは分らぬ談である。此問題は彼等によつて決せられるのではなくて、誰かゞ彼等の爲めに決してやるのである——先づ少数者によつて決せられるのである。そして作品の價値が高かければ高い程益、其人數は少い。此少數者の意見が、智力に於て第二位に屬する人々に傳へられ、次に其人々によつて一層範圍の廣い一層劣つた多數の

人に傳へられる。之は各階級の人が上の階級の人の自分に優れてゐることを十分認めてゐるから、其意見を尊重する爲めである。かやうにして時の経過と共に、遂には正しい着實な意見が萬人に傳へられ、一種の信仰として萬人の維持する處となるのである。そして此場合其根據が不明であればある程益、強い信仰となる。(M.P.I.1.1.1.)

二 藝術品の與へる快樂と利益

藝術品の與へる快樂と利益は之を五つの原因に歸すること

が出来る。

第一、力の觀念。藝術品を作出す際の精神的肉體的努力を感じ又は認める場合。

第二、模倣の觀念。作出されたものが他の何物かに類似することを認める場合。

第三、眞の觀念。作出されたものが事實を表はす上に忠實であると認める場合。

第四、美の觀念。作出されたもの自身又はそれが暗示し模倣する事物の美を認める場合。

第五、關係の觀念。作出されたもの自身又はそれが暗示し模倣する事物相互の智的關係を認める場合。

力の觀念

例へば柄の處から尖きまで彫刻した印度人の髻かみを見る時、長い間手間のかゝつた事を認め、夫れに要した時間と努力とを想像して其長さに比例した愉快を感じる。かやうな力は固より低級な力である。併しかういふ力を認めて感ずる愉快は、總て手間のかゝつた裝飾建築上の飾付けなどを讚嘆する際甚だ大なる要素を爲してゐる。ルアンの大伽藍の格子模様を正面から眺める時の愉快は、單にそれを造る爲めに費された時間と努力とを認めるといふ點に可なり原因してゐる。併しかやうな低級な場合に於てもそれは正しい愉快、委しく言へば高尚な愉快である。若し勞作の發現に氣力又は熟練の發現が加はれば、

力の感じは一層増加する。氣力と熟練に機智と判断力が加はれば、力の感じは更に十倍する。

模倣の觀念

一物が一見他の物に似てゐて、其類似が殆んど人を欺く程度に達して居ると、吾々是一種の愉快な愕き、一種心地のよい興奮を感じるものである。此感じは手品を見た時の感じと性質上全く同一である。吾々が藝術上の作品に之を認める時、委しく言へば其作品が然うでないと思ふものに類似してゐるのを見る時、吾々は所謂模倣の觀念を得る。何故かやうな觀念が愉快であるかといふ理由を研究するのは吾々の目的外であるが、唯人は静かな愕きを受ける時、誰れでも其動物性に愉快を感じずる

ものであること、かやうな愕きは一物が一見然うだと思つたものでないことを知る時、最も明瞭に引起されるといふことだけは明かである。處て模倣の感じを完全に且最も愉快に受ける爲めには二つの條件が必要である。第一は其類似が人を欺くまでに完全なこと。第二は同時に何かの方法でその偽りであることを證明すべきこと。故に最も完全な模倣の觀念、模倣の愉快は、一方の感覺と他の感覺とが互に矛盾し、眼は圓しと言ひ、指は平たしと言ふやうに、其點に關して双方の感覺が互に自個の證言を主張する場合である。従つて突起凹凸毛髮天鵝絨等を平坦な表面に表はす繪畫、感覺の第一印象を絶えず經驗によつて打壞はす蠟細工などの場合に最も鋭く此愉快を感じる

のである。併し大理石像の場合はどうか。大理石像は他のものとは見えない。大理石像は大理石と見え又人の形に見える。併し見える許りてなく現に大理石であつて、又現に人の形である。大理石像は見た處も實際も人間ではない、併し人間の形に見え又現に人間の形である。大理石たると肉體たるとを問はず、形は實際正直形である。形の模倣でもなく類似でもなく本當の形である。チヨークを以て紙上に描いた樹枝の輪郭は模倣ではない。それはチヨーク及び紙と見え樹とは見えない。その示す形は樹の形のやうだと言つては可けない。それは現に樹の形なのだ。そこで模倣の觀念の限界が分かる。模倣の感じは一物が態々其實質と異つたものに見えて、手品である偽

りてあると感ずる其感じに限られてゐる。そして其愉快の大小は相違の大小、類似の完全不完全によつて定まり、類似するものゝ性質にはよらない。例へば單に模倣の感じから起る愉快は若し類似が同様に正確であれば、相手が畫中の英雄であらうと其乗馬であらうと全く同一であるに相違ない。

故に模倣の觀念は單純な愕きの愉快を生ずるのが其役目である。但し其愕きも高尚な意義高尚な職務を有つた愕きではなく、手品を見て感ずる賤しい詰らぬ愕きである。かやうな觀念かやうな快感は藝術から受け得られる最も厭はしい觀念最も輕蔑すべき快感である。何故かと言へば、第一かやうな愉快を感ずる爲めには表現された物の印象する處訴へる處を排斥

して、それは見える通りの物でないといふ點に注意を集中しなければならぬ。かくして總ての高い立派な情緒又は思想を起すことは物理的に不可能となり、同時に人の心は全然感覺的と言つて可いものを喜ぶことになる。吾々は涙を見て苦悶の結果と考へることも出来れば、技術の結果と考へることも出来る。併し同時に双方の結果と考へることは出来ない。涙を見て技術の巧みなのに驚けば、苦悶の印として同情を起す譯には行かない。

模倣の觀念の卑しむべき第二の點は、それが看る人をして事物其者の固有の美を味はしめないのみならず、眞に偉大なものは模倣が出来ないから、單に卑しい詰らぬ物からでなければ、そ

れを感じることが出来ない點である。吾々は猫や胡弓を描いて丸くて手に取れるやうに見せることが出来る。併し大洋やアルプス山を模することは出来ない。果物を模することは出来るが樹木を模することは出来ない。花は模することが出来るが野は出来ない。彫刻した玻璃器は出来るが虹は出来ない。従つて人を欺く模倣力が發揮された繪畫は、皆詰らぬ題目を描いたものであるか、或は其模倣が題目の詰らぬ部分即ち衣裳寶玉家具といふやうな點に示されてゐる。(以上の考と一見矛盾するが如くにして實は然からざる考をウスキンは他の處に述べてゐる事を注意する。譯者)

第三に模倣の觀念は力の觀念を伴はないから卑しい。成程

素人には模倣が困難に思はれ、其成功が賞讃を値すると考へられやうが、併しその素人でも、かの人の知らない方法で奇妙な結果を生せしめる手品師以上の仕事を、美術家がやつたとは到底考へることが出来ない。又心得のある人にとつては手品師の方が遙かに立派な技術家である。彼等は手品の方がずっと困難な技術であつて、繪畫の人の欺く模倣力よりも一層技術師の頭を要することを知つてゐる。實際かやうな模倣力を得るには、正しい眼と着實な手と適度の労作があれば可いので、以上の特質は其模倣美術家を時計師留針師其他器用な細工人と決して少しも區別するものではない。

眞の觀念

眞といふ言葉は、藝術上に用ゐられる場合、心又は感覺に對する自然の事實の忠實な叙述を意味する。故にかやうな叙述の忠實なことを認める時、吾々は眞の觀念を得る。

眞の觀念と模倣の觀念との相違は主として次の點に存する。

第一 模倣は物質的の事物に限つてゐるが、眞は物質のみならず情緒印象思想の叙述を含んでゐる。眞には物質的眞と同様精神的眞がある。形の眞と同様印象の眞があり、質の眞と同様思想の眞がある。そして印象と思想の眞は前者に比して幾百倍も重要である。故に眞は一般に當筈なる言葉であるが、模倣は單に物質的の事物を寫す藝術の一局部に限られてゐる。

第二 假令夫れ自身は事物の姿形を表はさない一種の記號

であつても、訴へる相手の心に一定の意義を有してゐさへすれば、眞を叙することが出来る。事實の觀念を心に起し得るものは、假令少しも其事實の模倣又は類似でなくても、眞の觀念を與へることが出来る。假りに——事實あるとは言はないが——假りに繪畫に於て、言葉と同様、實物に似てゐる爲めてはなく、事物のシムボル又は代用と見做されて、夫れによつて實物同様の印象を與へる手段がありとするなら、此思想傳達の媒介物は全然傳へる實物に似てゐなくても、正しく眞を傳へることが出来る筈である。併し模倣の觀念は勿論實物との類似を必要とする。模倣の觀念は單に知覺力に訴へ、眞の觀念は思想の力に訴へるのである。

第三 上に述べた理由の結果として、眞の觀念は事物の唯一の性質を叙述した場合にも存在するが、模倣の觀念は實際の事物が現存する際に普通吾々の認めるだけの性質を表現してゐなくてはならぬ。例へば白紙の上へ筆で描いた樹の枝の輪郭は、形に關する事實を若干叙述したものである。これだけではまだ何物を模倣してゐるとも言へない。かやうな形の觀念を自然は決して線などで表さない。況んや間に白い空地を具へた黒い線などで表はさない。併し其輪郭は若干の事實の明瞭な印象を心に與へ、心はそれが樹木の枝に關する以前受けた印象と一致することを認め、従つて眞の觀念を受ける。若し二線の替りに刷毛を以て薄黒い形を描けば、枝と空との間の或る

陰影の關係を傳へ、眞の他の觀念たることを認めることが出来る。併し尙ほ模倣ではない。白紙は少しも空に似てゐないし、薄黒い影は少しも樹に似てはない。或る一定數の眞の觀念が一緒に集まつて初めて吾々は模倣の觀念に到達するのである。

従つて模倣の觀念は澤山の眞の觀念が結合してゐるといふ點に於て單純な眞の觀念よりも一層高尙であるといふやうに一考へられるかも知れない。若し眞の觀念の完全なことが模倣の爲めに必要であり、或は眞を眞として考へることが模倣の爲めに必要ならば、或は然うだらう。併し注意すべきことは模倣の効果を生ずる爲めには單に吾々の感覺が普通認めるだけの又認める位な種類の眞さへあれば可いのである。處て人

間の感覺は普通、特に熱心に或る目的の爲めに働かなければ、距離と凹凸に關する眞の外、他の如何なる眞をも正確に認めないものである。感覺が極く單純な形の眞を認めるだけでも長期間の研究と注意が必要である。例へば國民美術館の第十四號クロードの「港」の圖で、眼の處へ片手をあて、人が坐つてゐるあの埠頭は甚だしく遠近法が誤つてゐる。かやうに此畫家の眼は十分研究を積んでゐるにも係らず單純な平行六面體の外形を認めるだけの力すら得なかつたのである。況んや枝や葉や四肢の複雑な形は尙更のことである。故に何處か本當の形に似た處が人を欺くには必要であるが、此似た處を形の「眞」と呼ぶことは出来ない。といふのは嚴密に言ふと眞といふものに程